

樂園の記録の解説

すべき者なりとす」(Dogmatic, S. 78.) 前節に於て擧げたる聖書中に小説の元素あるを容るす處の學者等は勿論樂園及び其生活の記録中にも其元素あるを認むる者なり、然れども斯かる元素を承認せざる學者中にも之れを以て精細なる歴史の記録とあらず寧ろ人間宗教歴史の第一段を寓言的に記載したる者と説くなり、又此記録は眞實なりとする學者等は一般に之を摸表的の歴史とあす、^{スウェーデンボルグ}は之を純全たる摸表とあせり氏の説によれば創世記の始めの十章半にては只靈上の事のみ尋ゆべし歴史上の事は少しもなければなりと人間の組織に關して天主教者は煩瑣學派の説を循守し二重の區別をあせり、新教の學者の多くも亦同説を取れり(ホッポ、^{エチ、ヒ、スミス、}、^{ミム、ミトド}等皆然り)、彼等の云ふ處を見るに靈魂と精神とは其實性に於て區別ある者にあらず此兩者は同一の實體なれども其關係を異にし其容貌を異にするのみなり、然れども之に反して三重性論者も亦あざにあり、^{デリッ、チ、}、^{バン、オス、}、^{ホル、}、^{エチ、}、^{ミム、}、^{グッド、}等此を代表す後

靈魂の二重性論を取る者

三重性論者

の兩人の實は同様の説を主張し普通一般の三重性説を唱へたり、即ち靈魂は動物的生命の根源にして精神は二層高等なる理性及び道德性の根源なりと稱す、^{左レ、}、^{グッド、}、^{キンは}靈魂は精神と連結するによりて禽獸にある動物的生命と區別するを注意したり、其言に曰く「人間の内の精神は其性質中にて諸靈の父なる無限の靈と相通する部分なり、是は本我、身位、人間中の人間おして此内部の泉源より思想も感情も執意も品性も皆流れ来るなり、是は實に人間性質の最高の部分尤も神に近き部分神の眞像ありと云ふべし、靈魂は則ち肉躰に生命を與ふる根源なり是れは敢て精神の如く自由自動のカあらず又は肉躰の如く見るべき物質にあらず又は内より或は上より輝されたる自覺力を有するにあらず、凡て其智識を五感より引き來り其人性即ち依て以て禽獸の靈魂と異なる所の者は之を精神より引き來れり、斯くして靈魂は精神と肉躰との連鎖とあり精神を肉躰の範圍生命中に下し而して肉躰を精神の器械機關に上ぐるなり」(Christ and Humanity, 1875) ^{ブ、}、^{ツ、}に依れば靈魂の精神に於けるは關係の關

係あり兩者は同様の性質なれども同一の實體にあらず、精神は人間の中
 にある神の光、エホバの燭臺あり而して靈魂は其より發する光輝ありと
 云(Biblical Psychology II. Sect. 4.)、アリツヂは己の論據よりしてマンシヨルの
 説……靈魂は精神と肉體の兩者より發すと云ふ説を批評して曰く是れ肉
 體の精神に對して獨立なるを唱ふる者にして詐なり、又思惟すべからざる
 混合性質を假定する者にして誤りたるを免れずと、又初代教會内にて
タシアン、及びアイレニマス等の唱へたる三重性説の一種……即ち神の
 聖靈を以て第三の要素となすの説も近代に至て尙之を代表する者あり、
アリツヂのヨウツベルラインの説を採萃して曰く「聖靈も亦人間を組成す
 る一要素と數へざる可らず、蓋し聖靈のとは人間の内に働く方の根源あ
 れば自然の體のみならず唯肉體と靈魂とのみと云ふべければなり」(Ibid.)
 靈魂は無體なりとの説及び其自然不滅説を離れたる者は近代に於ても尙
 未だ多からず近代の神學者中にて前説に反對したる第一の人はヨヨキ
グリスドリなり、氏は明白に斷言して曰く人間は純全たる物質的存

靈魂無體説
 に反對した
 る者の例

身位不滅の
 議論

在者なりと、尙近代に及では科學者の感覺教の物質的の分子稍を神學界
 に横流したりしが、斯かる正統教に反對する甚しき要素は己に先きに基
 督教の心情を失ひたる者お非ざるよりは著しき影響を及ぼすこと能はざ
 りしあり、物質説を取り之と同時に靈魂不滅の教理を保守せんと欲する
 者はスウェーデンボルグの説……即ち人の脱しき見るべき肉體の中に既に
 天體生存すとの説の中に其論據を置くか、若くは又肉體復生の時其以前
 の人性恢復され同一の人となるとの説の中に其隱場を見出すに過ぎず、
 靈魂不滅の證據に關しては先時代に行はれし議論尙多く行はると雖ども
 基督信者の心識の證を重んずるの傾向甚だ強し夫れ生命は其永續に價す
 る者として其始あるは則ち其永續の確證あり、苟も真正の信徒は皆其一
 身に幾分か基督が其身お於て客觀的に示されたる神人合一の大事實を實
 驗するなれば其生命なる者は其根源と同一永遠ありと感せざるを得ざる
 なり、此心識こそ靈魂不滅の證ありとは彼等の議論あり、然れども此議
 論は信徒即ち神と靈の交親を爲し基督に隠れある生命に與かる者の不滅

を證するに適當なれども人間一般の不滅を證するの議論としては不當なり。是を以て此議論の結果として否か其發達と符合して靈魂不滅は只宗教の信念を受けて之に依て養はれたる者に限るとの説を取る者甚だ多數なるに至れり。フレイゼ、フリス、及びエドワルド、ホフメイター等は其著じき者なり。又其他カントの議論に従ひ人の完全に至るべき性あり之を望むの念あるを以て靈魂不滅の證となす者もあり。又十八世紀のマルツ派哲學を取る人々が重じたる靈魂の單純なることも其不滅の證として近代に重せられず。蓋し始めある者は必ず其終わらざるの理は一般に承認せられたれば靈魂の單純なることも造物者の目的を示すの外其不滅の證據とはあらざればなり。カントの論議も亦靈魂の單純なることを内省の中より天主教會に於ては靈魂直造説を以て正確なる教理となしメイランゲルの如きは殆ど之を天主教會の定教と云へり。(Dogmatische Sätze)是を以て見ればカントが受傳説即ち氏が發出説と稱せし説を唱道したるが如きは著じき勇氣あふしに非ざれば能はざりしを知るべし。新教の内には直造説と受傳説

直造説か

受傳説か

両説並稱者

と共に行はる。エムモンズは直造説を取り其反對を呼んで聖經にも哲學にも矛盾すと稱せり。(Systematic Theol., Sermon XXXIX.) ホンテは直造説は始より改革教會の取る所の教理なりと唱へ其所論に於て證據を擧げて直造説を主張せり。之に反してルーツ派の學者の多數は今尙受傳説を取る。又其他の教派中にも之を唱ふる者あり。エドワルドの如きホップキンスの如き若くはウキスレー、ソットソンの如き近時に於てはレイモンド及びホップの如きは皆受傳説を取る者あり。左れどホープは直造説を全く棄てず。此點に於てハープは近代神學の大傾向と一致するが如し。即ちカーニス、トマソン、及びエチ、ヒル、スミス、の如き受傳説の代表者も亦直造説は一箇の眞理を示すを許容せざる可らずと云へり。其眞理とは則ち神の致行力……若し其直造の力にあらざるとするも……は一箇人の靈魂の起源に關して共働する者なりとの事是あり。マーランセン、ドルナー、及びローゼ等の説によれば直造説及び受傳説は相互に補充する者ありとす。

靈魂前存説
を取る者

非カルビン
派の神旨と
墮落の關係
に付ての一
般の説

靈魂前存説はユニリアス、ミューラーの取る所なり氏は、原罪の問題を解
説するに當て前存説を取るの利あるを唱へて曰く夫れ罪性附着して以て
各人を有罪と宣告する者は其實罪あるにあらずんば不合理たるを免れず
故に各箇人が此現世お存在する前に自ら罪惡の方に歩を向けんと決心し
たることあるを知る可しと、エドワード、ピーチャーも亦此説を同様に使
用せり、エフ、エチ、ヘツチも亦前存説を取るが如し只氏はピトキヤ、若
びミューラーの如く實際的の利害に支配せられたるにあらざるに依りて
第二、墮落及び其結果。……
非カルビン派の一般お取る所の説は左の如し、夫れ神の意志或は致行力
は墮落と直接の關係ある者にあらず只是は自由の道德者を創造するに依
て從て墮落の可能性をも供へたるなり、罪惡に至るの可能性も神聖の性
質を發達する可能性も共に全く有限の自由存在者に屬す、少くも其初階
は之に屬すること明なり、而して神の欲する所は罪惡に至るの可能性を
實にせんとするにあらず却て聖性質を發達する可能性を實にせんとする

近代のカル
ビン派中に
「インフラ、
ラフサリア
ン」説を取
る者の傾向

意
前命令の
ある一階
カールビン派

にあり又非カルビン派の此論據に反對する者は恢復説を取る者にあ
其説は現世に罪惡を経験するは遂に永遠の神聖に至るの緊要ある練練と
あると云ふにあり……
カルビン主義の諸派中には神と墮落の關係に付て諸々の異説あり、「サ
オラ、ラフサリアン」派は墮落を以て第一の定命を満たすの方法とあせしが
此説は近時に至て取る人少なし、之に反して「インフラ、ラフサリアン」派
は盛る行はる然れども該派は先時期に於けると同く今時期に於ても神意
と墮落との直接的の關係を全く否拒したるお非ず該派の人々が一般に取
る所の説の形式は神は如何なる事も凡て生じ來る者は之を命令すと云ふ
にあり、又彼等は神の定命は萬事件の必ず生ず可き原因なりと説けり、
是故に彼等が墮落は神の許容的の命令に依て起ると云は其意蓋し墮落は
全く偶然的の事件にして彼の場合に或は起るを得或は起らざるを得ると
云ふに非ず、墮落の必ず起るを保證する命令と云ふにあり、是を以て彼
等の所謂「許容的」とは神の直接の力に由らずして定命の成就せしを云ふ者

の用語中に
ある「許容
的命令」の
意

エドワード
派の説

なり、故に實際墮落の確實なることに對しては少しの影響をも與へざる
 かり彼等の多くは實に「許容的」なる語に是よりも大なる意味を附せざりし
 ことは彼等が神の力は凡ての罪を妨げ又同時に自由道徳者を害せざるを
 得と宣言するに依て明なり

エドワード自身は神の意を以て墮落の原因となさざりしかども氏の繼續
 者中には普通カルビン派の語氣に背て神のアドムの罪の有効原因なりと
 の意を以て説く者ありホップキンスも亦此結論を去ると違からず氏は聖
 書の或る語を引て曰く「此等の章句に依て見るときは神は凡て生じ來れる
 道徳上の惡を前定したるが如し此意味に於て見る時、惡の起原及び原因
 の神の力に在り」と云ふべきか云々氏は又著しき記述をなせり、曰く「人間
 の罪深き意志即ち行爲は天然的道徳的の行爲にして神は是等の原因あり
 人は即ち罪惡腐敗等の原因ありと區別するが如きは實に不充分且つ矛盾
 にして到底人心を満足する能はず斯かる區別は其意神は罪惡の行爲に於
 て罪の原因にあらざ神は只其神聖の徳を働かして凡て此等の事を定めたる

り」と云ふにあらざれば了解する能はざる者なり云々 (System of Doctrines Pt. I.
 Chap. 4.)

ホップキンスはホップキンス派の極端を代表する者なれば尙て層明
 白なる語を以て此主義を説けり、氏はアドムの墮落を説き去らんとする
 多くの方法を廢棄して曰く「此等の方法はアドムの墮落を以て第二原因の
 作用に由るとなす者にして未だ不充分たるを免れず故に神の作力に依頼
 して之を説くこと必要なり、又神はアドムに於て第一の犯罪を欲じ又爲
 さしめたりと説くに勝れるに若かず」と (Systematic Theol. Sermon XXIX) 又次
 の惡の起原に關する極端説中にも神の力に依て第一の犯罪の生せしを論
 せり、「夫れ惡は何處より來ると云ふ多年爭論の端を開きし此問題に答ふ
 る眞正の答は惟つあり、即ち惡は萬物の一大第一原因より來ると云ふ
 にあり」(Sermon XIV) ホップキンスは時としてはアドムは自由の行爲に依て
 墮落せりと説くことなきにあらざ然れども氏の所謂「自由」なる語は單に「己
 れの意を以て」と云ふに異ならず人間の意志は神の作力に對しては全く器
 械的關係に過ぎず

ニュー、ハ
ブン派の立
場

以上神を以て墮落の有効原因とせし所の説を非難したる者はニュー、ハ
ブン派の神學者ヲモテ、ドワイトなり氏は神學の傾向に關して謂て曰く「余の見
る所を以てすれば此國の一部の神學は識らず知らず凡神教に傾向じつと
あるが如し、即ちスピノザの凡神教を去ること只一步の内にあるなり何
となれば無限の力のみを存して有限の力を否拒すればなり」云々(Sermon XV)
ドワイトの反對は實に幾分かニュー、ハブン派の特質を前指するなり、該
派は罪惡と神意との關係を最低度に持來し只カルピン派普通の傾向に背か
ざるを期せり、「エス、メプリ、テ、テ、ア」の次の言を見るときは此派の傾
向を知るに足るべし、曰く「夫れ神は最良の道德的組織を用ひて而して道
徳者の背逆を妨ぐることを現今よりも大あること能はず又現今組織に於て
も道德力は不正に用ゐらるるよりは寧ろ正當に用ゐらるるより方一層好かり
しからん又造物主は道德者の背逆は實際なりしにもせよ尙各人間の善に
働き惡に働かざるを欲すること勿論あり……世界中に神の從順より寧ろ
背逆を愛し聖義よりは寧ろ罪惡を好むの意を示す言葉一もあるなし」

ハ、オス
タル、オス
の説

自由及び責
任に欠く可
らざる條件
に關して非
カルピン派
一般の説

神は既に自由道德者の存在を許し而して尙凡ての罪を妨ぐるは能はざ
ることなり云々と云々(Lectures on the Moral Government of God) ハ、オス、タル、オス
も亦同説を取るが如し其言に曰く「罪は神に因て生ぜむと云ふは其始め神
の意匠に依り定められたりと云ふと同く不當なり……故に神の定命の結
果となすべきは罪惡の可能性にして其實際にあらざる……神の始めの目途と
せし處の世界の罪惡ある世界にあらざる罪惡なき世界なり罪惡は完全の世
界に缺くべからざる者あり世界をして完全に進まじむる爲めに神は
之を反對し玉ふあり」云々(Dogmatics, Sect. LXXXI.)
以上陳述したる所に依て見るときは凡ての神學派に普通なる説也即ちア
ダムは其犯罪に於て自由にして且つ責任ありとの宣言は必ずしも一様の
教理を含蓄するおらざることを知るべし、即ち自由及び責任の本性に
至ては種々異様な説かれたり、非カルピン派(哲學上の必至論も反對す
る人)は自由或は狭く云はば責任と附帶する自由ある者は或る境遇に於て
其結果を左右するの力を含蓄する者あり、即ち撰擇の力或は反對を撰取

するの力を有せざるべからずと唱ふ、彼等の教によれば自由にして且つ責任ある者は決して始より或る一定の進路に限定せらるべきにあらず假令其限定は内部的にせよ或は外部的小せよ若し彼は撰擇の力を除去すれば最早自由責任者の思想を離れたる者なり或は内部的の限定は自由と兩立する一種の特質の力に由て來ることありと云ふ者あらんも其特質の力は人自ら撰擇力を使用して而して製出せし者とするにあらずんば矢張り自由者殊に責任者と云ふ思想を撲滅する者なりとぞ、非カルピン派の中には此假定説を許容する者ありと雖も其他の人を之を否定し自由と反對撰擇との思想は敢て離るべきものにあらずと唱ふるなり、*シュニツカ* *スミユトラ*は前種に屬し假定説を取れり、氏は形式的の自由と眞實の自由とを區別して曰く「形式的自由とは即ち反對を決断し之を撰擇するの力を含み、故に意志は實際決行する所に異なる途を取るの才力を有するならば其人は即ち自由ありと云ふなり、然れども眞實の自由は之に異なり神聖の必然と同意あり若し人の意志は神より遠かり其性質に反對

自由の
責任の
限定の
神聖の
尊厳の

シュニツカ

自由の
責任の
限定の
神聖の
尊厳の

なる惡に依て引付けられ動かさるゝに於ては眞實の自由にあらざるなり又若し其意志未だ決せず孰れにも傾かざるは眞實の自由にあらざるなり然らば人は最も高き意味にて自由ありと云ふは單に其意志断然善に決向し惡の能くすべき思想をも除却する所謂内部の必然よりして次る行爲に顯はるゝ是れ之を云ふ者なり、又形式的自由の關係は如何と云ふに前者は後者に對して必然的前因なりと云ふべきのみ、眞實の自由……断乎善に決向し惡の可能性を除去する力……は若し形式的自由より生ぜざりしならば思考すべからず或は少くも自由と思考すべからず即ち人間の自定自行と思考すべからざるなり、形式的自由は實に眞實の自由の本源の状態なりと云ふべきか然れども是は道德界に於て有する運命は單に眞實の自由の方法たるにあらず、若し意志は充分に且つ眞正に撰擇したるときに尙其反對を行ふの力ありと云ふは道德上より云ふにあらず形而上學的に云ふ者なり、云々
(*Christian Doctrine of Sin, Bk. III, Pt. I, Chap. 1.*) ホイドンは此説に反し教へて曰

ホイドン

く「ミューラー」の所謂形式的自由ある者は漸消し去る所の要素にあらずして實に一箇緊要的の性質にして何時何處にも必ず自由に無くてもなむ者なり。此故に神の全智或は其默示よりすれば人間が聖善の撰擇を固持するや否やを確知する能はず之れ單に蓋然の事のみ。只此蓋然は疑に妨げらるる事とあく信仰を置くに足る事なるべしと云ふ。哲學者中には「リード」は尤も明に反對撰擇力の自由の要素たるを論せり。曰く「道德的存在者の自由とは蓋し自己の意志の決定を支配する力を云ふなり。夫れ或る行爲は己れの欲せざる或物——心意の状態にもせよ外部の境遇にもせよ——に必然的に來りしからば最早自由を離れたる者なり。又動機に關して謂て曰く「余は凡て具理的の者は動機に依て動かされ又動かされざる可らずと信ず。然ども動機の勢力は其性質に於て有效的原因と異なるや大なり。動機は原因にもあらず又は致行者にもあらず。同有效的原因あるに非ざれば動機ありと雖も必要なきなり」と云ふ(On the Active Power)。「アウガルト」も亦「リード」と同様に自己決定を論せり。氏

リード

アウガルト

ステワ
カント

は動機を名けて働作の機會或は理由と稱し以て働作の有効原因と區別したり。其語に曰く「必然説の議論は萬づの變化は必ず原因あるを要す」と云ふ格言より其力を得る者なれども此格言は無生界に適用す可くして有智者は適用す可らず。蓋し有智者は自己決定の力なまじは思考す可らざるを以てなり」(Works, Vol. VI, Appendix)「サー・キリヤム・ハミルトン」は其不可知的の傾向と一致して自由も必然も共に思考す可らずと言へり。左れを是は推想上より云ふ者にして推想上より云は、兩方共に困難ありと雖も氏は實際上意識の證言に依りて自由を認承し而して實に「リード」ステワルト等と同じ定義を用ひたるが如し。「カント」が此問題を論ずるは一種特別あり左れを氏は自由を以て尤も正確なる自己決定と思考せしこと疑なし。氏曰く「若し吾人の自由はラノブニツが所謂 automaton spirituale (即ち心理的比較的にして超絶的絶對的にあらず)に他あらざれば其實は時計の自由に勝る所なきなり。夫れ時計は一度まかるときは則ち自ら其運動をおせばあり」と云ふ。カントは實に自由の性質は關しては高き所見を有せし

カント

も氏は自由の運動場を見出さん爲に尙一層高き地步に進で現象界即ち經驗界以外を昇るの要を感せしなり。蓋し現象的經驗の事物は皆時間即ち前後の範疇内を連続する者なれば原因結果の法則を免るゝ能はさればなり、只實相界有智界即ち時間の範疇の適用せられざる事物のみ能く此法則を超越す是故に人に自由を得させんとらば之に此三重の性質を附與せざる可らず。而して其經驗的の自己と其顯現とは之を有智的の自己の自由決定の結果として見ざる可らず。』(See both Critique of Pure Reason and Critique of Practical Reason)

近代のカルビン派の内には自由を以て單に有意的とあじ反對選擇の如きは無限の想像談ありとあす者最も多し。『エドワードの立脚地は茲處にあるや明なり氏の定義によれば自由とは機械的制限を除去するに外ならず、自由は人をして種々雑多の動機及び勢力の中に在て惟一の進路を取らむひる者にして二途の間も他方へ轉向するを許さず各箇の執意は即ち鏈の環の如くにして至る其前因を依て決せらるゝと萬有界に於けるが如し、』

カルビン派の自由の定義

エドワードの説

此前因を動機と名くるときは意志なる者は常に最強の動機ありとせざる可らず。次に引用したる言はエドワードの自由意志論より取り來りし者なり。今之を見るときは氏の持説の實に前陳の如くあるを明にするを得べし。『曰く必然的の者と完全なる結合を保つ所の者は同く必然的なり。蓋し結果の必然に由る……夫れ意志の働は凡て或る原因を有す故に其原因と必然的の結合をなす之を以て結合及び結果の必然によりて意志の働も亦必然的なりと云ふ可し。是れ實に意志は凡て動機に依て動かさるゝを見て知る可きあり……靈魂は假令ひ起動的の實体ありと雖ども第一の働に由るにあらざれば其働さを數様にする能はず又異様の働作或は結果の原因とならんには以前の異様の働に由るの外能はざるなり。若し然らずとせば同一原因或は同一原因力は其他の點に於て異なるをくして而して異なる時に異なる結果を生ずと云はざる可らず……若し吾人にして將來の執意に關して誤さき智識を有するを得せしめば即ち事件は必然的なりと論證するを得べし。然れども將來の事件にして全く偶然的にむて必然を離

れたる者は確實に知るを得ざることは左の如く證するを得べし、夫れ事物は徴證エビデンスなくして知らるゝ者にあらず若し然らずと云はば是れ矛盾を含蓄するなり、何と云へば知らるゝ事物は知る所の者に明確エキプレットならざるべからず明確ありと云ふは則ち徴證を見ると云ふと同じければあり、然れども如何なる智力の者も徴證なき處に徴證を見ざるあり故に將來の偶然的の者は知るを得ざるなり神の智力能く將來の事を前知するは蓋し因果の連絡ありて其事をして必然的に生せしむればなり云々

ホイドンは意志の自己決定説を駁するに當ては假定の *Reductio ad absurdum* を以て論せり、氏言ふ若し意志は自由に一種の働に自己を決定するとせば是れ撰擇によらざるべからず、而して撰擇は一箇の働なり、故に此働に自己を決定するには他の撰擇によらざる可らず、而して他の撰擇も亦之と同じ遂に無限に至て止む時をけん、此議論は被造物(神自身は言はず)と雖も創始的の働を爲し得ると云ふ思想を看過せし者なり、抑て執意は有意的か或は無意的の前因あつて之を決定せざるべからずと云ふと

氏の
reduc-
tio ad ab-
surdum

の
論

必然論
少エドフ
ード

雖ども斯かる能力を創始的の力とを有すれば意志は即ち創始的の意志にして自己決定の力を充分有するあり、是故に非必然論者はホイドンの論難に答ふるに當て自由者は其意志創始的の働くと宣言するを常とす、ホイドンの言ふ處を見れば意志は完全有力の原因にして適當の境遇に在て種々の執意を始むるを得ると云へり、意志は何故に斯く撰擇するやを解釋せんとして他の途を求むるは是れ意志の完全の原因たり又原因たり得るを否拒する者なり、其論の論難を答ふるに當ては、

少エドフは必然論の方向に進むし事其父と異なるが如し、氏は其父と同一反對撰擇の力を除去し而して動機と執意との間に因果的關係あるを唱へたり、其父は論據を解釋するを見るに云へるあり曰く「総理エドフは人間は單に受働的存在者なりと云はず、左れと若し此語は人間の執意は其意志以外の或る原因より生ずる結果なりとの意ならば彼は之を承諾すべし」と、又曰く「人間は決定し又は運動するが故に自己決定と自己運動をなす者なりと云ふは不當の言にして無根の説あり、恰も軀體は

動く故に自動自決的なりと云ふと同じ、是れ蓋し外部の原由力を除去したるより生ずる誤なり」(Disserion concerning Liberty and Necessity, Chap. II.)
 エドワードの會で云ひしことあり「道德的必然と吾人の云ふ處の者の道德的行為の必ず來らんとする確實を云ふに過ぎず」(Ibid., Chap. VI.)
 然れども氏の所謂確實なる語の意味は非必然論者の用ゆる語と同じからず、總理デュー氏は能く之を洞見し云て曰く「少モロワードは數々道德的必然とは道德的の確實を云ふに過ぎずと主張するも氏の確實の單に智識の確實にあらざる其事物の確實其關係の確實を指すや明なり……氏の唱ふる道德的確實は或る道德的行為と其原因との間にある真正確實の連絡に外ならず、故に絶對的に偶然の行為を確實に知るの謂にあらざる單に主觀的の確實にあらざる客觀的の確實あり即ち事物の必ず起らざるべからざるを謂ふ者なり」(Examination of Pres. Edwards' Inquiry on the Freedom of the will, Sect. VIII.)
 ホッピンズ曰く「有意的の者は自由ありと、反對辯擇の力の如き、氏の無稽の説として却るる所なり、エムモンズも亦同論據に立て論きて曰く「神は

ホッピンズ

エムモンズ

其造らし有智者に對して許容をあたふ能はず蓋し許容されても人は神の力に由て欲し或は爲すの外働くを得ざればあり、神は其道德者に許すに獨立の働きを以てするに非ずして却て之をして神の欲する如く働かしめんとて凡ての行為に干涉するあり、神は其自然界に於けると同く道德界をも支配して己れの目的に従はしめんとす故に其被造物も其事業と同く造られたる目的に合はせらるゝなり」(Edwards, Sermon XXIX.)
 又「デューグリンは自己決定力の教理に反對して曰く「吾人は人間の意志は全く働機に由て決定せらるゝ者と信せざるを得ざるなり」(Lectures VIII.)
 ホッピンズも亦同結論に達せり東キンドソアのイー、エー、ローレンス及びブリンストンのアトラー

グリン

ワード

エドワードの責任説を取る者他にも亦あり

ターは共に反對辯擇力の説を否拒する學派の代表者なり、責任の問題に關しては此等學者は一般にエドワードの格言を適用せり、格言に曰く「道德者の状態及び行為は其性質善か若くは悪なり、讀むべきか若くは讀むべきあり、其原因は關係なしと、ホッピンズは此格言を辨護

ホッヂノ責任論

せり、故にミエトウの説を論駁せり(ミエトウの説は人間は其行爲及び行爲に依て作れる性質に對して責任を有す、是故より自ら作らざる性質より生ずる行爲は己れの責任外なりと云ふにあり)、ホッヂは其性質に由て惡に傾くも假令其惡性は共造にもせよ天賦にもせよ或は得有せしにもせよ注入せられしにもせよ人は其惡行爲に對して責任を有せざるべからずと論ず(Pt. II, Chap. 9, § 3.)

近代の新英國神學者等はエドワードの自由責任説を變更す

近代の新英國神學者等は著しくエドワードの自由責任の説を變改するの傾向を顯はし來り其用語を改め而して確實と必然との間より一層の區別を大にしたなり(ニユー、ハブンの博士テトロアは教て曰く反對撰擇の力は自由責任者に缺くべからずと、レーマン、ピーチャーも亦同説を説て曰く「反對撰擇を許さざる撰擇は是れ宿命論の昔の教理なり」)(Views Theology)ホッヂの著者ありとし、反對撰擇力を人に與へたり其言に曰く「吾人は現在欲する處と異なる心を抱くを得との確信を心識す是れ吾人が直覺の眞理の場

フヒンチーの説

天主教會内にも其教會の原罪説を脱離する者あり

合に於て今確信する處の外に確信する能はずとの確信を心識すると敢て異なることなき」(Lectures on Systematic Theology)以上の如き記述は熱心なるアーミミアン派の人々が彼等に向て求むる處たりと雖も此種の學者中にも實に其重なる人々の中より之あり(尙或る前因は必ず其後果として或る行爲を來たす此結果を變更する力は決して用ひられざる力なり、神の預知とは此前因後果の無變(然れども必然にあらず)の連續に由ると唱ふる者あるを見るときは己れの立場に彼等を引き來らしめんとするの尙大業たるを感せずんばあらざるなり)次に陳述すべき問題はアダムの自由の誤用より來れる結果即ち原罪は如何んと云ふにあり、天主教の神學は勿論トレントの決議中に含蓄する所と一致する者にして原罪には道德の腐敗若くは欲乏と共に罪科をも含むと云ふなり、是を以てヘーメスの神學系統の非難されたる理由は原罪中より罪科の分子を除去し單に天性の腐敗を以て原罪となせしにより嚴固なるルーラル派は尙原罪中より腐敗と罪科との兩者を含蓄せしむるなり、

に付てル
アル派改革
派及びメソ
ヂスト派ノ
答

例へばトマシアスは説て曰くアダムの罪科は人類の罪科なり故に人類の
一部たる者は罪科を分配せざるを得ずと然れども此説に對しては多く
の反對説生じ來れり而して罪科の生ずるは各箇人意志の自由なる働によ
りて本來の惡僻を用ゆるによると説く者甚だ多しトマシアスも亦ド
リンの時以來此説の廣く行はれたるを明言せりカルビン主義の一派は
固く原罪は腐敗と罪過とを含有するの教理に沾着す然れども同主義の他
の一派は腐敗のみは遺傳し來りてアダム犯罪の直接結果と云ふべきも罪
科は此腐敗性に屬せられ(強迫さるゝよあらず)罪の撰擇をあたふに初て
生ずと説くなり「罪の普通なることは假令撰擇力ありと雖も尙確實な
り(必然的にあらず)とは信仰箇條の形式あり」(Fisher, New-Englander, Aug;
1860). イー、エー、パークは此説を持す今世紀の新英國神學者の多數も亦然
り、其他長老派中の新學派中にも亦之ありヤン、オスワルドも亦罪科
を除去するの點に於ては全く此説と同意なり、氏云ふ遺傳の惡性と遺傳
の罪科とは畫然區別せざるべからず前者は許諾すべくして後者は拒絕す

惟一派の説

罪科の分子
を説明せん
とする諸説

べしと、英國の「メソヂスト」派に於ては通例罪科遺傳の説を承認せしこと
はウキスレー、ウットソン、ポープ、及びリッグ等の記録より見るを得
べし、左れを彼等は是を以て單に理論的事とあし實際は基督贖罪の無
制限の恩恵に依て抹滅せられしと説くなり、アイミニアン主義「メソヂス
ト」派は之に反して罪科遺傳の説は彼等の神學系統内に入るべからざる者
と論じ單に腐敗遺傳のみを認識せり、惟一派及び其他の合理派は原罪な
どの問題は特別ふ之を論ずるの要なしとし遺傳と云ふ普通の思想中に含
蓄せしめて之を論せり即ち彼等は只漠然と遺傳は各箇人の性僻を決定す
るの一要素なりと稱せり
罪科説を取る所の者も其罪科の「アダム」の子孫に附着する理由に至ては互
に一致せざる所あり、其内重なる説は第一實跡説、第二「アダム」は人類の
約定的の首なりと云ふ説即ち直歸説、第三、「アダム」は人類の天然的首
ありと云ふ説即ち間歸説等なり、勿論第二説は「アダム」の天然的首たる
を拒む者にあらず然れども重に其約定的の首たるを主論するなり、第一

説は非リ、アム、デー、ラー、ウェッドの盛に代表する所たり、此の論を見るに第一に意志の最深の働きは心識の下層にありと唱へ而して茲に種々の反對論を掃除し而して進て第一の背逆に論及し、アダムの墮落は實に各箇人の意志も深く關係せし事ありと稱せり、今氏の真教理として稱揚する處を擧ぐれば次の如し曰く「アダムの子孫は皆アダムに於て又アダムと共に神より墮落せり、是故にアダムに於る體めらるべき事は其子孫に於ても同く體めらるべし、是れ蓋し同理由に出つ同理由といひ即ち墮落は強迫せられしにありず自ら決定して生せしを云ふなり蓋しアダムの意志は單に一箇單獨の意志にありず人間種類全體の意志なり」(Theological Essays.) エドワードも亦質躰説を代表し説て曰く被造物界に於ては同一或ハ一体は全ク神の全權に依て定めたる所よる而して神は實にアダムと其子孫とを一躰と定められたれば彼等は眞に一躰たりとエドワードの説によれば罪科の歸着する前には勿論犯罪及び腐敗あつて是が理由とある者とす、又アダムの約定的の首たるを理由として直歸説を唱へたるは近代のスコツチ神學

神學

腐敗遺傳を説明せんとする諸説

エムモンズの新説

者及び米國のプリンストン學派にあり、又アダムの天然的の連格により、腐敗性の遺傳を理由として間歸説を唱へたる諸教派中に甚た多く見ると得べし例へば新英國神學者中にはウット、グライラーあり浸禮派にはホペーあり長老派にはエチ、ビー、スミスあり歐州の改革派にはヘン、及びスタップヘル等ありトマ、アスは間歸説と直歸説とは相俟て始めて最良の説を造るべしと云へり、又腐敗性は如何なる方法に依て子孫に傳來するやの問題に關しては先期より一の進歩をみせしを見ず、靈魂受傳説、勿論相傳の法則によると稱す、又直造説は此問題は神秘に屬するとなじ或は同様の者よりは同様の者生すべしとの神の制定によつて第一の靈魂の状態は其子孫の靈魂にも及ぶべしと稱せり、エムモンズは此思想を氏の練習主義と其神力説とに連結し新説を唱へて云ふ道德的腐敗の傳來は神が新生者に罪ある練習を創造すとの事實に由て説明するを得べしと、其言に曰く「アダムの第一の犯罪の理由により神は其子孫を道德的腐敗の世界に生れしむ若し如何に

して此事あるやと問は、其答は到て易し、夫れ神は稚兒の靈魂を創造するに當て之に道德的の力を與へて未熟の人間となせり而して神は己れの欲する如く之をして欲し又行はしめん爲め其内に働く、再言すれば其心は道德的腐敗の存する處——に道德的練習を生せしむ蓋し道德的腐敗は道德者にあらざれば生せず而して道德者は神の力に依て働かざるに非ずんば働く能はず是を以て見れば稚兒の道德的腐敗は成人の場合と同様に解釋して妨なきなり〔Systematic Theol., Sem. XXIX〕

原罪の狀態に居る人間の道德力の度如何んどの問題に對しては既に前に陳述する所を以て諸派の答ふる處を知る可し唯ルーテル派中の最極端者は先代ルーテル派の特質なりし處のフウガスタン派の極端説を維持するのみなり、カリス此極端説は持す可らずと宣言せり舊カルビン派の立場は一般に先代の改革派の信條の唱ふる處と符合するあり、新英國神學の代表者中には舊時の説に反する者尠からず彼等は云ふ墮落したる者と雖も神の法則を守るの力を有すと、然れども是れ只一方面を記述せしものと

自然の人の
道德力に關
する説
ルーテル
派
舊カルビ
ン派
新英國派の
呈出せる區
別

メソヂスト
神學の説

罪惡の性質
及び起原に
關して近代
神學者の諸
説

彼等は又此力を稱して自然有力と云へり此れ蓋し道德無力に對して云ふ
あり、自然有力とは即ち理性或は意志等の力にして神命に従順するを得
べしと云ふ者あり、道德無力は斯かる従順を自然の人の欲せずと云ふ者
なり、一は義務の量にして他は恩寵の大必要を宣言する者なり、メソヂスト
派は單に自然の人は神の法則を守るの力なきを唱ふ然れども彼等の系統
に於ては自然の狀態を單に理論的の空想にして實際に於ては神の靈凡て
の道德者に助けを爲さざるはなしと説けり

罪の性質及び起原に關して近代行はるゝ重なる説は次の如し、(第一)罪は
消極的及び積極的の兩面を有す又單に行爲に附着す可きのみならず行爲
の裏面にある性質にも附着すべし——殊に其性質の腐敗は一箇人の自治
力を使用して而して來りし場合に於ては然りとす——罪の起原は人間の
自由選擇にあり、非カルビン派は此自由選擇を以て全く偶然的となす然
るもカルビン派は其必ず生せしは神の定命によると稱す、以上の普通の
定義を保持する處の者も罪の種類多きも之を一箇の私慾と概言するを得

るや否やの問題に關して異説を持せり、スコリアスは此問題に然りと答へたり又新英國神學者の多數はエドワードの徳の定義即ち徳は仁惠或は一般人類を愛するにありとの立場より發程し罪の性質は私慾にありと云へり、之に反してホッチ及びホルネ等は然らずと答ふホッチ曰く私慾は罪の本性にあらざして寧ろ其初現なりと、(第二)新英國神學者中には以上に異なりて罪は全く有意的の働きに限ると唱ふる者あり、エムモンズは即ち此説の熱心ある代表者なりオベリン神學にも亦此説あり、博士フリンチーの代表する所となる、エムモンズは其特異なる神學說の爲に罪の思想變更せしあり、(第三)罪は單に消極的なり缺乏あり其起原は被造物の本來の不完全にあり制限にあり、グライブニツは此説を取れり氏の説に曰く道德上の惡は單に缺乏なり即ち暗黒の如く寒冷の如く然り自由意志は罪の近因と稱す可し、然れども其本源の原因は即ち不完全にあり神は被造物に凡ての完全を賦與する能はず否らざれば之を神とせずあり故に被造物は必然的に限らるる者あり其智識完からず其道德

力全からず是故に罪は必然的に非すと云ふとも尙避く可らざる者たるあり、(Theodicee) ハッチはライブニツと罪の消極的なるを唱ふるに於て一致し又其樂天教にも一致せり(氏の樂天教は世界は思考し得べき最善の者に非ず能くすべき最善の者たりと唱ふるなり)、氏は又罪の結果は積極的なりと許すも是れは敢て罪の性質の消極的なるを否定するに非すと云へり(Reason in Religion. BK. I. Essay VII)又曰く「犯罪を來す處の者は積極的に非ず消極的の狀態なり靈魂内にある一情にあらす靈魂の罪に至るを防ぐ力の缺乏なり……故に靈魂をして其暗黒の家に靈の光明を受けしめよ然らば虚無陰性の罪は忽ち去るべし」と(第四)ローセ及び其他の學者の説によれば罪の性質及び起源は共に物慾にあり人間は物慾的の性質を以て其進路の始とす彼の職への之を靈化するにあり、然れども物慾的の性質は常に此目的と齟齬す是れ罪の起る所以ありシライエルマヘルの教は稍之に接近し罪とは下等の力が神識力に抵抗するを云ふと説けり、(第五)近時の或る學者は唱へて云ふ反對抗敵は發達に欲く可らざる者あり故に罪は進歩的道德界に

必要なる要素なり夫れ異様なければ秀逸な畫に光明と陰影あるが如く自然界に吸引力と反撥力とある如く道德界にも亦善惡の反對なるべからず、斯かる反對なきの人生は支那人の繪畫の如く流れざる溜池に似たりと、ヘーゲルの罪の教理は此説の形を取るが如し氏によれば道德上の惡はあるべからざる者のにあらざる殘存すべからざる的の者と云ふべし、人間の靈は惡を制服せざるべからず然れども其適當の發達をなさねば惡の呈出する試惑と戦ふを要す、ヘーゲル、ホッブズ、キントス流の過激説を取る者は眞に罪惡と最大善との關係に就ては有神記者は神意と罪惡の起源との關係に於ける意見に従て説をせり、ホッブズ、キントス流の過激説を取る者は眞に罪惡の存するの最大善の方法なきと斷言す他の人々の稍を過激の度を減じ罪は最大善に對して最大必要物なりと稱す尙他の者の方法とも云はす若くは最大必要物とも云はす單に最大善を自途とする系統に在るは罪惡の可能性の避くべからずと云ふなり此三説各其代表者を有せしが第二説は尙廣く行はる然れども第三説はカール・ヒン主義の漸々衰ふると共に漸々盛

罪惡と宇宙
全体の善と
の關係に付
ての諸説

なるの觀を呈すれば今代の持説と稱するも妨なきあり

近代に至るまで、神學の諸説は既以前數章に於て大半を指

第四章 贖主及び贖罪の教理

第一節 基督の身位

正統教の本流以外に流れたる基督論の諸説は既以前數章に於て大半を指
 示したり即ち哲學の章に於て略示したるが如く、カントは基督を以て重
 道徳上の理想とあし、フビクナ、シェリング、ヘゲル等は之に異なり神
 人合牀の最も高尚なる歴史上の實現とあせり、シライエルマヘルには基
 督は完全なる神識力の秀絶なる手本、人性を取れる神の生命、靈上の
 交親の紐又中心ありとす、舊合理論者は基督の人性上の完全を説くに當
 ては冷々として神秘玄奥的の元素を棄て自然教者の如く神人を隔絶した
 り、新惟一派は多少超絶學派と同く基督の人性は神と親密なる一致をあ
 ずも身位上の一致にあらずと唱へたり、又基督傳の著者にてはストラウ
 スは基督の歴史を以て實歴史にあらずと強唱し基督の身位を重せず寧ろ
 之を以て人類の理想として尊ぶ可し蓋し基督は他の人よりは多く人類の
 理想を示したればあり然れども基督も亦尙其理想の一部分を示せるに過

近代に至るまで
正統以外に
ある基督論

きすと論せり、レナンの基督論は之を批評的に又は道徳的に考ふるも學者として名ある人の著はせし者と信する能はざる書に於て之を見る、氏は基督を稱賛することありと雖も基督の智識並に道徳の秀逸あるを輕侮して措かざるなり、マエンケルはストラウス或はレナンに比すれば稍尊敬の手を以て基督論に觸れたり、氏は基督に於て罪なき人類の模範を見又明晃々として神の眞理を反映する明鏡を見るなり、左れど氏亦舊合理論者の輩に倣ひ福音書の奇跡を恐れ遂に其果は合理派と同一言葉肉躰となるの理を拒み神人の全き一致を却け基督を以て單に神の使者と思考したるなり、

教會内部に於ては此時期中殊に著しく基督の身位なる問題を研究したり、是れ神學者の多數が神學の問題は凡て基督中心主義に依て論せざる可らまど唱ふるを見て知る可し、而して基督論研究の結果は他の點に於ては如何にありしにもせよ其人性論は實際の進歩をさせしと疑なきが如し實に如何なる時代にてても今時期程基督の人性上の完全を尊重し又之を例解

近代には殊に基督の身位論を重んずるの風あり

「ケノッス」の教理

トマシアス

せん爲に豊富なる文學を發達せし時あらざるなり、夫れ基督は神性と人性との一致せし者なりとの説を確取せん爲に多くの定教説ありと雖も此時期の晩年の神學者等は多く「ケノッス」位を虚ふするの意の教理を注意し是を以て神人合一の理を説かんと勉めたり、此教理を尤も極端の形狀あて採用し以て基督の身位論を決定せんとしたる者はトマシアス、ゲス、及びエプワードなりとす

トマシアス論じて曰く神性の自限なる者なくんば人性と眞實に一致すること能はず夫れ神性は人性に比すれば其範圍無限に大ければ此兩性共存すと云はば是れ正しく兩元ある者にして身位上の一致を廢棄する者なり、故に一致の基は神性の制限にあり言葉肉躰となりし時は即ち是れ神性の制限にして永遠の「ゴエス」は自らを虚ふし神の榮を棄て神の自覺力を去り神の屬性の内全能全知全在等の用を棄つるのみならず之を有することをも止め、凡て人間地上の生活の範圍内に來れり然れども神の本質を虚ふせしにはおらず只其存在の法を棄てたるなり、實に「基督は其存在の全躰

アリツテ亦「ゴス」の虚位説を取ることをトマッアスと異なるなし、マル
テンセンも亦甚だ強く「ケノシス」の説を取れり氏教へて曰く基督にある「ロ
ゴス」は發達の法則に従ふ者あれば制限せられたる者と見ざる可らず「人間
の性質は生長し又發達す其度に従ひ基督にある神性は又生長す彼は其發
達の進歩に従ひ其歴史を悟り是に依て其永遠より前存せしを知り又父よ
が出でたるを知るなり」と(Dogmatik, S. 136.)

ドルナーは「ケノシス」の教理を更へたり
グッドキンの説

ドルナーは「ケノシス」の教理を非評し之に更へて人性の受容性「生長し」
「ゴス」の通與は益々大となり茲に進歩的の一致をさすの説を呈出せり、氏
は一致は倫理的の者にして勿論神は其初を働き玉ふと雖も人は單に受
働のみにあらずと思考したり亞米利加に於て基督の身位を論じて全くゲ
ヌと同一なる説をなせる者ありヘンリエム、グッドキンの著る「基督及び
人類」中には明白に此説を論せり氏云ふ基督成肉の教理は實に三の定説に
基くと(一)神人兩性の本性的の一致、(二)基督の天の人性、(三)「ゴス」は摸
形として天におり云ふ眞理、(三)「ケノシス」即ち「ゴス」の自限、是なり氏

「ケノシス」の教理と舊
時のルーテ
ル派の基督
論との關係

の「ケノシス」の説は其「アポリナリ」の説に註解せる次の言を以て充分知る
を得べし曰く「アポリナリス」の系統の缺點は基督に人間の靈魂あるを拒ま
しが爲にあらず何となれば人間の靈魂は若し基督の中に働かざりしから
ば之を要せず若し働かしあらば其身位の一一致を毀つ者あればなり然れど
も氏の系統の誤謬は「ゴス」を以て只一部のみ人とありし者とし凡て有限
の人性に屬する制限を受くる者とせざるにありと、ホレヨス、プロテラも
亦實に同結果に至るの説をさせり即ち神人ある基督ハ只一の靈魂を附與
せらるると稱せり然れども氏は此結果に至る理論的の道を餘り注意せざり
き、
此時期に於ける「ケノシス」の教理は舊時のルーテル派の基督論に大變化を
與へしこと明なり舊時は「ケノシス」を以て「ゴス」の虚位を意味せしにあら
ずして只人性が神の性質の用或は公然の用を暫く棄てたるを云ひしかり、
又此教理はルーテル派の「サムミニオニカチオ、イデオマタム」の教理と合は
ざることも明なり、殊に「ゴス」の論じたる所に於ては然りとす夫れ基督には

基督の人性
前存説

「ゴゴス」の外に靈魂あしとする時は勿論肉身に全在の性徳を附與して場處の制限を超脱せしむる外神の性徳を通與するの必要なきなり、マルタンセンは此全在の性徳通與説を以て稍凡神的に傾き不定の基督は万有中に充布するの説に陥るとあして之を却けたり然れども近代の學者中には尙舊時の定説ある肉身に全在説を固守する者あり、
 過る數十年間に於て「ケノシス」の教理は諸方に於て進歩をなせしこと明白ありと雖も吾人の見る所にして誤かりせば神學界全躰より見るときは尙甚だ少數ありと云はざる可らず、
 基督の人性は其一二の要素と共に成肉以前にも存在せりとの教理は前時期に或る人の呈出したる者なるを近代に至ても其處此處に之を取る者あるを見るヌウキデンボルクが神を以て無限の人間と思考せしは其中に前存の人間と云ふ思想を含蓄する者なり、
 「アイサククワット」は論じて曰く基督の靈魂は以前より存在し万物の元始に生れ「ゴゴス」と身位上の一致を保てり而して成肉に於ては天の智識、力、及び榮光を棄て、物質的の躰

近代の贖罪
説數多し

裁判説

を取り漸次發達の法則に従ふに至れり」と(Works, Vol. VI)
 第二節 基督の贖罪事業
 今時期に於ては基督の贖罪事業に關して新元素を輸入せし者なしと雖も新附屬物を結合せし者あれば之を合して論ずべし何となれば贖罪の重なる説は既に前數時期間に悉く呈出せられたればあり、
 種々の雜説は之を傍に記載することあし吾人の重に論ずることは次の數説ありとす、(一)裁判説 (二)純全政治説 (三)變更政治説 (四)道徳説 (五)玄奧説
 裁判説は單なる償還説にあらざして寧ろ特殊の償還説あり其大要は左の如し基督の從順及び苦痛の單に赦罪の恩恵を顯はす所の一般の状態にあらず撰まれたる人の諸罪を償還する特殊の状態なり故に基督が彼等の爲に律法の要求を満たしたれば彼等の刑罰を免るゝは最早恩寵の働きにあらずして公義の働なり恩寵は初め償還の状態を具ふる時にのみ關して其一箇人に適用せらるゝ時は恩寵にあらずして公義に關す此説の代表者中

尤も重かる一人の言は左の如し「基督が其人民の爲に與へんと欲し玉ひし恩恵が實際彼等に與へらるゝは公義の働にして當然のことなり此理蓋し二つあり第一彼等は基督の從順及び苦痛の褒賞として基督に與へんと約束されたり、神基督と約して曰く若し基督要求せられたる條件を満たし彼等の罪の償還をせずには彼等は救はるべしと、第二償還の性質より云も此理明なり若し公義の要求満足されたる以上は再び強迫せらるゝの要あり基督の事業は恰も借財を拂ふと同じ而して此兩者の類似は償還の性質にあらざして此より生ずる結果の同一あるあり即ち償還せられし人は自由となり其自由となりしは兩者共に公義の作用なり」(Hodge, Pe. III, Chap. 6, § 3.) 以上の言に従ひ償還をせられし人は慥かに救はるべしと云はば是より推して償還は只撰まれたる者の爲にのみなされしと明言するを得べしそは撰まれざる者の救はるゝは偶然にもあらざと彼等は主張すればなりホッヂの基督の徳は非撰者の罪をも凡て掩ふに足るとの理を以て其説と救は万人の爲に供べられたりとの理とを兩立せしめんとし

政治説

純全政治説

たり之に反して非カトリック主義の人は神の定旨と福音の供とは其範圍同一なれば神の定めたる者の外に救ありと云ふは不當なりとし万人の救と撰擇説との間に兩立を見る能はずと必ず要するに裁判説は尤も過刻あるカトリック主義と共に存し共に消長する者なりと云ふ教授者トカチター氏は此説を以て舊時長老派の代表となすは當れりと云ふべし政治説は贖罪論を裁判所より取り去り之を主權者の手に渡せりと云ふべし此説は神を以て道德世界の管理者にして正義の行政者なりとし裁判説の基督は撰えられたる人の義務を果したれば彼等の救はるゝは最早恩寵に供はるべしと當然の事なりと云ふを拒むる基督の事業は万人に救の狀態を供へたるに過ぎず左れば万人大赦の恵に浴するは決して當然の事はあり一人として當然に救はるべき者なしと稱するなり純全政治説の大要は左の如し贖罪の必要は神の本性に存するにあらざして道德政治の緊急要求あり神の聖潔の要求にあらざして行政上の要求あり又は道德政府の尊榮を保存する方便なりと云ふを得べし博士マイレ

川の著「基督贖罪論」には此説を主張するあり氏は勿論神には施刑的の公義あるを云ふと雖も又同時に此公義は單に神の感情に止まりて之を満足せしめんとは必ずしも神性の要求することにあらずと云へり氏の論旨は左の言を見て知るを得べし曰く神は義ある管理者あれば罪に相當せる刑罰を與へざるべからず然れども此單に私憤を晴らさん爲にあらず又は施刑的公義を満たさん爲にもあらず只道德政府の爲なり夫れ道德政府は罪惡の爲に紊亂されたれば之を修むる者あかる可らず基督の贖罪事業は即ち其方法なりとセルマンに於てはストア及び其他の超理論者は同説を取れり又モドワルドの後の新英國神學の代表者も多くは此説を信ず然れども彼等が此純全政治説に何の點まで固着するやを決すること難し何となれば彼等は只舊説を革めん爲に單に道德政治の要求のみを主唱したればありては舊説の論議を離れざる可しと云ふべきなり

變更政治説は贖罪を以て神の道德性を満足し又其道德政府の尊榮を保存する方法なりと唱ふる説あり夫れ神の道德法と道德性との間には區畫の

變更政治説

道德説

淵あることなむ一方に要求する所は他方に要求する所他方に満足する所は一方にも亦満足する所ありフットソンの大略此論據に立つ者の如し又現今「ペンテコステ」派神學者中にも此説一般に行はる只其用語は種々異なるあるなり吾人の判断をして誤謬ならしめばエチキス、ヒル、スキスの贖罪論も亦茲に類別するを得べし近時の純粹あるルテナル派の多數も亦變更道德政治説を取ると云ふべし蓋し彼等は一方にて裁判説に反し基督の償還を以て施刑的公義の満足となさず一般の道德性の満足となし他方に於ては「神の」の説即ち純全政治説に反して贖罪の基礎は神の道德性におきて單に行政上の必要におらずと唱ふるを以てなり(ドナルド、トマソン、カトリス、スミス、オグデン等の説を見よ)

道德説(道德勢力説)の大意に曰く基督の事業は神の方面に於ては決して人間改復の條件におらず神の性質より出づるも其政治に基くも決して救贖の條件に非ず(即ち)單に神の撰める方法と名くべき耳神自身は既に和睦し居り又は其道德政府の主權者として完全されば一として其性質又は其法

律に要するにあらざるは只人間改復の致勵力キビシクを要する耳即ち背ける民をして再び己れに歸らしめん爲に之を感化する力を要するあり語を更へて云はゞ人間の成聖を要して神の満足を要するに非ず而して神の子の謙遜従順苦痛を以て茲に人間を聖化する勢力を供へ玉へり基督は人間の感情を惹き附け又其信仰を勵ますことに依て實に救に至る神の力たるなり近代ゼルマンの神學者中に此説を取る者ありトルナル、ローゼ、ニッチ等は其代表者あり亞米利加ではホレース、ブレイナル尤も重かる者なり氏の著「代理的犠牲」中に見へたる氏の持説の最大は今吾人の擧げたる者と異なる所あり氏又教へて曰く愛は神に於ても又人に於ても代理的犠牲の一大根源なり十字架は永遠より神の心中に存せり、和睦の必要は全く人にあつて神に非ず、基督の犠牲の人は贖ふ力あるは其道德的勢力に依て人間の反逆を挽回する力あるに依る、此勢の豊盛あるは驚くべき神の愛の現あるが爲のみならず凡て其道德性の現はれあるが爲なりとブレイナルは又神の方にては律法の尊榮を圖るの要なしと教ゆと雖も實際基督の犠牲は

玄奥説

律法に無量の尊榮を歸したりと唱ふ其言に曰く吾人は基督の肉生苦死に於て見る所の者は凡て神が其驚くべき犠牲を以て其律法の尊榮を大ならしむる者なりと又曰く基督が律法に従順なりしかば吾人は大に律法の尊榮を感するなり基督の従順を以て律法の尊榮を保つことは之に背く者を罰せ従はざるを責むるに依て之を保つよりも一層深く吾人の尊敬心を益す者なりと、故にブレイナルが基督の事業の價值を見ることは敢て前説の主張者と異なる事なし相違の點は只之を以て人間改復の方法とせずと神より要求する所の條件となすでありブレイナルは其後の著書に於て己れの説を稍變更し神の和睦と云ふことを容るじたりしが是神が罪人の爲に犠牲を供へて自ら和睦したることなりと稱し吾人が己れの爲に價を拂て敵を救ふの念を生ずると同く神も亦自ら和睦せりと唱へたるなりコレリツチも道德説を取りたり其他英國々教の廣教會内にも之を取る者多しエフゾー、モリスの教は尤も能く道德説と玄奥説とを結合せしむと云ふなり

玄奥説の最大は左の如し贖罪事業の最大目的は人と神との間に生ける結

合をなさねばとするに在り肉を取て人となりし「ゴゴス」は則ち此結合の紐あり彼の人間の機關を具へて新らしき中心生命とありたれば此中心生命は亦して神人的の徳は凡ての枝に流れ渡るなり此説は既に初代教父の時代にも行はれたることは曾て論じたりしが近代にてはオエランガー之を代表して著名なり又神學者中には全く此説のみに偏せずと雖も玄奥説を以て贖罪論の一要素として見る者も尠からず例へば「リッチ」の次の言を見るときは明に之を知るを得べし曰く「ゴゴス」が人性を取り人性が「ゴゴス」に預けられたることは是れ實に新人類の基礎にして決して動かす可らず神人ある基督は實に新人類創造の力を有して又其生長の根源を有す基督は於て新人類の始祖置かれたり而して此人類の終結に至るの確なる保障あり又其播殖の力も非常に強ければ遂には全人類新にせらるゝの望なきにあらず」(Bib. Psychology, Sect. 12) 然れども「ゴゴス」は贖罪論は關して「惟六派の夫れ道德説は近代の惟六派の特説あり」(Bib. Psychology, Sect. 12) 夫れ道德説は近代の惟六派の特説あり「ゴゴス」は贖罪論は關して「惟六派の取所を記し曰く「聖書は基督の贖罪事業の最要點を其死のみに置て而

して其生活、性質及び教訓を棄つることをなさず夫れ基督の死が贖罪事業の二要素として人間救贖の効ある者とせられしは其代理的の價値ありしが爲にあらず又は其神政府の困難を取り去りしが爲にあらず只人間の心情及び生活に大感化を及ぼせしを以てなり」(A Half-Century of the Unitarian controversy) 然れども「チャニン」の言を見る時は初めの「惟六派」の内には上記の説を以て満足せざりし者あるを知るべし即ち基督の死は單に人の悔改を促がし革心を勵ますに依て救罪の原因となるとの説を悦ばず尙其他の法に依て救を興ふべしと思惟したるが如し「チャニン」曰く「我等の多くは此説明を以て満足せず却て聖書は救罪の原因を基督の死に歸すること實に特殊にして吾人は如何にしても基督の死には刑罰を取り去る特異の勢力あるを信せざる能はず唯聖書は如何ある方法にて斯くあるべきやを指示せざるのみ」(Works, Vol. P. 89.) 然れども「ゴゴス」は贖罪論は關して「惟六派の夫れ道德説は近代の惟六派の特説あり」(Bib. Psychology, Sect. 12) 夫れ道德説は近代の惟六派の特説あり「ゴゴス」は贖罪論は關して「惟六派の取所を記し曰く「聖書は基督の贖罪事業の最要點を其死のみに置て而

摸表説

決定

キリスト陰府降臨説及
び終末學の
問題を注意
する傾向近
代に生じた

キリストの
成肉は罪惡
あるが爲あ
るや否やの
問題

飲く可らざる者のみと云へる者あり少キドワード・ホッブズ等、其モ
モンズ、ボンド、フヒスク等、其人々ありフヒスクは此説を代表して
記して曰く「舊時は基督の贖の起動的及び受働的從順の兩者より成るとの
教理を持せしが今は贖を單に受働的從順に限り全く基督の苦痛より成る
との説を持せしことあり」(Bib. Sac. July. 1865)之に反してドワイヤ
及びウツリは基督起働的從順と其受働的從順との兩者の間を別つことの
不可なるを論じたり

基督陰府に降れるの教理は十八世紀の終に至て新教者の餘り論ずる所に
あらずなりしが近代終末學の問題と共に新らしく注意を惹くに至れば聖
書は基督が現實陰府に降臨せし教理を説くや否やに關して諸説紛々とし
て存すドワイヤは之を註解學は之を然りと答ふと云へり其言に曰く
「現今の註解學の結果は古代教會の信仰と同く彼得は眞實基督が其死の後
其甦の前死の世界にて働きて玉ひたるを信じたものと説を承認するあり」と
(System of Christ. Doctr. 124) 又ホッブズも亦現實降臨の説を唱ふあり

試舊時の改革派の神學派の多數と同く陰府降下の眞の教理は單に基督が
暫時の間死の權力の下にありとの事實を云ひし者に過ぎずとせむ博士
ドワイヤの説は近代尤も廣く行はる其説は基督が依て以て罪人を贖ひた
る苦痛の尤も重大なるは陰府の苦痛なりと云ふにあり
基督の成肉せしは罪惡の事實、贖罪の必要ありに依る者にあらずとの
説は近代神學者の多く取る所なりドワイヤは此説を取り左の如く論じた
り若し基督教は絶対の宗教なりとすれば其中心たる神人は單に罪惡と云
ふ如き偶然事に基く者とは不能はす又神人の成肉を以て單に贖罪の方法
とあり又贖罪の目的に基く者となすは基督の一身の榮光を損じ又其大切
を欠く者なり人類は一箇の機關として神人に於てのみ其適當なる中心又
は頭を見出すを得べきなりとドワイヤは又此説を取る人々の名を擧ぐ曰
く「ドワイヤ、ホッブズ、ライプナウ、ランゲ、ゴットセ、レヨウベルラ
、ホッブズ、シムズ、及びエプスタッドと又此説に反對説を取る人々には
アズミル、ラトル、及びトマサスあり天主教の神學者アモアトは此問題に

關してスコトス派及びトマス派の中間の説を取り結論して曰く人若し罪を犯さず共基督は形を取て顯はれ玉ひしならん唯其形は基督の顯はれ玉ひたる普通人間の形狀よりは一層榮光ある者なりしきらんと

第二節 基督の事業の恩恵に與る事

前時期の同節に於て已に記載したるが如く天主教會内にはアウガステン派の説の流行尤も顯著なりし之と共に其反對の説も亦行はれたり然るに此時期にては法王のバイアス及びクイヌチル等の説を附し又トレント議會が合力説(恩に與かるには單に神の力のみならず人の力も亦働ふとの説)を教へたる等亦依り反對説益々勢力を得たり左ればアウガステンの預定説は今日に至る迄依然として存し未だ公然之を棄つるに至らざるなり是を以てペロインのごとき有名の學者は天主教はアウガステン及びトマス、アクイナスの預定説と預定は預知に基くとの教理との間を撰擇するの自由ありと教ゆるを見るなり夫れ此兩者の前説を取る者は幾何あるやを決するに甚だ難しと雖も之を後説を取る者に比すれば甚だ僅少なるや明

天主教がアウガステンの預定説を受け納れたる度

モラーの記述

なり蓋し後説のきは實に只トレントの合力説に符合する者なればなりモラーの次の言は實に天主教の恩寵説及び預定説を代表するに足る者あり其言に曰く天主教の主義に従ふときは新生なる聖事の眞實に成し遂げらるゝは必ず二つの働力即神力と人力とが相合して而して成る者あり故に新生は神人兩者の爲する所の働なりとす勿論神の聖なる力は其始め人を起し勵まし又活かす者にして人に之を來たし之を募ふの力ならずと雖も人は自ら許して神に起されざる可らず又自由は神に従はざる可らず神は始め人を助けて墮落より起たしめんとす罪人は之を承諾して起たざる可らず而して已に之を得るや即ち人は聖靈を受け漸次に進歩し假令此世に於て完全に至らずとも忠實ある共働に依り遂に元墮落し來りたる高尚の域に到達するに至るべし神は熱心に罪人の悔改を切望し玉ふと雖も敢て強迫を用ひ玉はず神の全能は全く人間の自由の範圍内に行はるゝ者にして決して之を破る者にあらず何とされば強迫は自由の上には立つ處の道德世界の秩序を紊亂する者なればなり是故に天主教會が人間の自由は

近代のル
テラ派及び
獨逸改革派
の極端なる
預定説に對
する傾向

獨逸
ルテラ派の

神の全能を屈服せざるべからず」と云へるクノエスチアの語「ヤシヤシ」を以てして專斷預定説を來らし又新生を得ざる者は自ら放棄せしむにあらざりて神に放棄せられたりと云ふに至るを以てあり」と(Symbolik S. 11) 曰く「ルテラ派教會にてはアウガステン派の預定派を一般に棄てたりセルマンの改革教會もまた十九世紀の初めより以降は此教理を棄てて取らざりて」云ふ所によれば教會一致の談合起りし時之を賛成せし人々は改革派の神學者中には預定説を固持する者甚だ稀にして只僅に例外あるのみと云ひ以ては至當なりと云ふ「ヤシヤシ」氏も亦曰く「セルマンの改革派の神學者は純全たるカトリック主義に於り殊に其預定説に關しては然らば彼等は寧ろルテラ派教會中のカトリック主義と密接な」(Germany's Protestantism, Theology and Religion) 曰く「ルテラ派は實に一致教會の代表者として專斷預定説を説きたるは其の唱へし所は敢て舊時の改革派の預定説に於り其氏の預定説は或る人々のみを永生に選擇すると云ふに非ず

中世
の神學

して各人を早くか或は晩くか新生せしむることを定めたりと云ふにあり是は於て神國の發達は漸々行はれ之に入るものは順序あり而して万人皆之に入りて後遂に發達の終結來ると云ふなり「ルテラ派は尙一層舊改革派の預定説を去ること遠し氏は實に人間が現今恩寵に與るは己れの方と云ふよりは寧ろ神の選擇に依ると云はざるべからずと稱すれども又云て曰く神の行政上より見る時は是は單に尙一層廣大ある恩寵と與らざるなるのみ夫れ一箇人の其順序に於て存するは神の國の全躰に尤も適當なるを以てなり神は眞實万人の救はることを欲し玉ふ只人の頑迷なる此希望をして空しくらしむる耳と斯くの如く「ルテラ派」の預定説を取り只其嚴重ある順序決定説を取らざりき又「ルテラ派」は「マルタンセン」等は眞正に悔改せしものは最早再び恩寵より墮落することなしと唱へて「ルテラ派」の普通の教理に反しカルビン教理の一方面に固着したり「ルテラ派」の神學の發展の歴史を著すに於て「ルテラ派」の神の恩寵の人に與らるる方法は如何と云ふに單力説即ち「ルテラ派」の

ローセ、ニ
ツチ、マル
テンセン等
の保存説

メランクトンの合力説は近代のルター派中に行はる

蘇國及び米國の長老派中にカルビ

奮奮に於て主張せられ又煩瑣學派の時代を通貫して盛なりし所の此説ハ近代のルター派中には益々衰へ去るの狀態なり是に於てメランクトン主義の教理代で勢力を振へりカリーニウス曰く「メランクトンの精神はルター派正統教理の爲に壓縛せられ居りしかども未だ全く制服せられず是に於てルター派の煩瑣學派衰微するや直に其權理を唱へたり實にメランクトンの論據は此教理の發達を導く所の眞理の印なりとも云ふを得べし」(Dogmatische II. S. 7) トーマス氏の論も亦メランクトンの合力説と接近す氏の教に曰く思龍の第一の刺撃は人之を避くるの方あり此第一の刺撃は依て人は其舊性を惜み其誘引に背くことを得るの力を與へらる此力を基礎として人は自ら思龍に隨ひ悔改信仰に進むを得べし又は隨ふことを好まざりて思龍の第一の刺撃をも消し去るを得べしと云ふも此の如き既述前に陳述したることありしが英國を教中の福音派はカルビン主義に傾向したる其中にヘンリッチ及びプロバントンは殊に著しき者なり然れども近代に於て尤も盛衰カルビン派の特性を辨護する所の者はスコットラン

ン主義の極端を代表する者

ト及び北米合衆國の長老派にあるが此等も於ても多少はカルビン派に背かんとする傾き非ずと雖ども尙カンニングハム或はホッデの如き有名なる人々はカルビン派の盛時に於けると同き勇力を以て之を唱へて止まざるなり彼等若し明言せざりしとするも其語中より明に推論すべきは左の説なり曰く人類の或る者は若しアダムに於て眞正の試を有せしとするも其外には一の試練に遭はざる者ありとカンニングハムの定罪の教理を論じたる次の言は明白に此説を示すに足る者あり氏は之を以てカルビン派の教理として記したれども氏亦勿論之を取る者なり其語に曰く「カルビン派の定罪の教理は如何と問ふに次の如し夫れ神は永遠よりして今日爲すことを凡て定め玉へり即ち救はるる人を定め玉ふと同一放棄せらるる者をも定め玉へり定罪とは如何なることあるやと云ふに信仰と新生との根源ある聖靈を彼等に與ふることを爲さず其自然の狀態に打棄て置て遂には彼等に該當する所の刑罰に附するを云ふあり」(Historical Theology 1870. Vol. II. P. 428) 茲に信仰と新生を來らする惟一の根源なる聖靈を禁

して與へずと云はば是れ明に彼等をして信仰と新生との能くすべきことを離れしめたる者あり能くすべきことを離れて何の試かあらんや若しありとせば木石にも之あるべしホッヂは普通の恩寵と有効の恩寵とを區別したるはカンニングハムの定罪の定義に比すれば非撰者に幾分の可能性を附する者の如し氏曰く「普通の恩寵は或る事を成すに足ると雖も心靈上の死を活かし心情を變更し新生を來らすには足らず普通の恩寵は人心との共働に依ては此結果を來らすべくあらざるなり」(Pt III: Chap. 14, § 4)勿論氏が茲に「普通恩寵は人心の共働に依て此等の結果を來らすべくならず」と云へるは「來らす能はず」と云ふよりは其意味強からずと雖も前後の文勢に依て觀るに氏の「可くならず」は同時に「能はず」の意を有する者なるを知るべし蓋しホッヂは論じて云ふ新生を來らす者は神の全能にして其働は人々に抵抗する能はずと氏は有効の恩寵を「神の全能」と定義したり曰く「新生は單に神の働と云ふべからず神の全能の働と云ふべし」と是に依て之を見ればホッヂは恩寵を抵抗すべからざる全能力に歸したれば人の可能性を

新英國派の
預定説の
範圍
新非の
贖罪の
眞理の
與かる
に關する
説等に
關する

際き去りたる者及び結局普通恩寵にのみ浴する非撰者は永生に缺くべからざる新生の恩は浴する能はざる者とあるべしホッヂは又新生なる語を稍狭き意味にて使用し明に之を悔改と區別したり新生とは即ち靈の生命の更生にして神の力のみ之に與る又悔改は新生に依て準備せらるると雖も人の力之に與て働く者あり舊長老派は前に云ひし如く其預定説及び單力説に加ふるに贖罪制限の教理を以てしたり」新英國神學は純全たる昔のカルビン派の如く專斷預定説を教へたれども同時に附屬の教理中には頑固に固着せざる者もあるなり贖罪制限の教理は之を取らず却て基督は萬人の爲に死せりと稱し之を解釋することアメリケ及びリチャード・ハックスタットの説と異なることなし新生の問題に關して彼等の所論一定せずと雖も一般の傾向は稍人力をも容れんとするが如し是れ其新生なる語を廣き意味にて主張し悔改と同意義に取れるを見ぞ知るべきなり又練習主義の代表者中にも數説ありエムモンズの如き極端家は新生を以て單に新練習の初階となす又アローアの如きは練習

の外に傾向或は習慣を重じたれども傾向或は習慣をさすは即ち練習に在り云へり又フットは練習の裏にある道徳性を認め新生とは此性を變化するにありて此より始めて聖練習の道に進むべしとなせり要するに彼等は新生を以て傾向或は性僻或は道徳上の嗜好或は行爲の根源を變更することなりと云へしかり又新生の本質は新撰擇にあり而して人は其撰擇の主なりと稱する人々は勿論人は自ら新生を來らすと信する者なり教授フヒンチーの明言せる所は即ち然りとす其の語に曰く「聖書中にある新生は新心と同意義なり而して罪人は自ら新心を造るべしと要求せらる」と (Lectures on Systematic Theol., 1878, P. 284) 左らば神の力は何邊に與るやと尋ぬるに氏は之に答へて人の意志に動機を與ふるにありと云ふなり其語に曰く「聖靈の基督にある真理を取て之を人心に示す……新生とは人の意志が真理に依て感化せらるゝとに他ならず」と真理は新生を來らすに當て幾何の力あるやに關してダニエルラヒスクは新英國神學を代表して曰く多數の人は大概次の論を承知するや疑なし「人の新生を來らせん爲めに神は

「メソヂス派と預定説」
 其説の範
 園説に及ぶ
 萬民に力説
 恩寵の意
 新理の新生
 眞理の新生
 等に關する

或點までは直接に働き玉ふ然れども或點に於ては間接に真理の方法によりて働き玉ふ神は只真理に依てのみ人を生れ更はらしめず左れは真理なくしては爲し玉はず神の直接及び間接の感化は意識に依て區別する能はず其夫々の範圍は道理に依て精細に推すべくもあらず」(Bib. Sec., July, 1865)

「メソヂス」派は其教祖の教旨を眞實に守り常々熱心自由恩寵と贖罪普及説を主張せり即ち説て曰く福音の招は神の奥内の心を顯はす者にして萬民に普く及ぶ者あり神は眞實に各人萬人の救はれんことを欲し玉ふ故に一人として預定或は定罪の定命の下に置かるゝ者なし恩寵は凡ての人に足れり故に人自ら務めて罪性を去り救贖に與ることを得べしと恩寵の方法に關しては「メソヂス」派は合力説を信す然れども恩寵の起始は神に在り人の力は素より必要ある要素ありと雖ども次位に位すとあす又説て曰く夫れ合働に依て結果の生ずる場合には最少の要素も其結果を生ずる條件とあることあり故に人は自ら其救の條件を爲さざるべからずと云ふ

順序に關する諸教派の説

とも敢て人は其救を自得し或は其救に該當すと云ふにあらす例へば乞食は物を受くるの條件として其手を延ばすことを求められたればと彼が受くる所は最早自由恩賜にあらすして彼も當然の物ありと云ふべからざるが如しと新生に關して「メソヂスト」派は通例之を廣き意義にて使用し只靈の事に初めて自覺したる事のみを云ふよあらすして全心の決然神に向ふに至りたる事を云ふと説けり又此派は練習主義に同意を表すること少し神は只欲する所の者のみを生れ更らしむと説けども同時に神の力は意志の特殊の働に及ぶのみならず其内部の性質或は傾向にも觸るなりとも説けり又ポルプは曰く「神の言葉は新生の方法又は力なり」と然れども此語は「メソヂスト」派全體を代表する者にあらす吾人の見る所を以て誤りからしめば「メソヂスト」派は大略前に引用したるフヒスクの説に同意するなるべし

「メソヂスト」派神學に於ては稱義を以て思想の順序に於ては新生の先に在らしむるが如しと云ふは其順序轉倒すルソー派も亦大半は新生を稱義の前に置くなりガフヘッド以來十七世紀及び十八世紀のルソー派神學者等は通例次の順序を用ひたり曰く啓發曰く新生曰く悔改曰く稱義是あり(Dornat, System of Christ, Doct., S. 132, n.)

稱義の元素を含むや否やに關してカルビン派普通の説

生を稱義の前に置くなりガフヘッド以來十七世紀及び十八世紀のルソー派神學者等は通例次の順序を用ひたり曰く啓發曰く新生曰く悔改曰く稱義是あり(Dornat, System of Christ, Doct., S. 132, n.)

稱義の問題に關しては今時期中天主教會を記述するの要あることなし何となれば前時期に於て決定したる所或は其註解等最早發達を容るゝの餘地あることありモロー及びペロンの如き有名なる著述家も新材料を與ふること能はざりき

新教者中には稱義の性質に關しては宗教改革の時の説を一般に承納したり稱義中には數多の元素あるべきも彼等ハ大概之を目して主觀的よりは寧ろ客觀的となし一箇人の内にあされしことにあらすして一箇人の爲に爲されしこととなせりカルビン派の學者は稱義の元素は多くあるを稱して曰く稱義ハ單に赦罪にあらす基督の義の遷着を含めば永生に至り万福に與がるの特許を蒙る者なりと例へばホッヂ、エドワード、ドワイツ、ヘルプ、ヘンズライン等は皆斯くの如く論せりルソー派の學者等も亦同

エムモンズの立場

説を唱ふるものあり左れどエムモンズは此説に同意するを否みカルピン派が常に稱義を分つて赦罪と永生の特許との兩つとなし前者は基督の受働的従順に基き後者は其起働的従順に基くと稱するを非難して左の如く云へり「聖書中にある稱義とは赦罪と云ふより其意味廣からず又狭からず」(System. Theol. Sermon LVI, LVII.) ユキスレーの語も亦之と異なることなし曰く「聖書に所謂稱義の意味は罪の赦なり」と(Sem. V.) ヴットソンの語にも亦此定義を含有せり曰く「新約書中にある稱義赦罪義の遷着罪の不歸等の語は皆同意義なり」(Theol. Inst. Pt. II. chap 23.)

ウキスレー及びソッダスト神學者の立場

「メソヂスト」神學は一般に稱義を以て赦罪と同一となし養子とせられ永生の繼嗣となることは稱義の元素と云ふよりは寧ろ其附屬とせり基督の義の遷着とは如何なる意味あるやに答へてウキスレーの左の如く云へり曰く「神は信徒を義と稱するは基督の義の爲にして信徒自身の義の爲にあらずとの意味あり」と(Sermon. XX.) 又信仰を義とせらるゝとは如何んと云ふに之に答へて曰く「信徒の信仰の義とせらるゝとは即ち基督の義を信仰

新教一般の稱義論に對する例外

するに似たり然れども是は前に云ひし所と異なることあり何とされば我が云ふ所は即人は信仰に依りて義とせられ行爲に由らずと云ふの外なればなり語を更へて云はば「各信徒の罪を赦され神に受けらるゝは只單に基督の行爲苦難の爲さればなり」と要するに信仰を義とせらるゝとは信仰は稱義の源因と已て功徳ありと云ふ意にあらず只神が適當ありとして定めたる所の條件たるに過ぎずとは「メソヂスト」派の主眼とする所なり又前に挙げたる各派は其に「稱義は只信仰にのみ依ると雖も義とする所の信仰は只夫れのものにてはあらず」との格言に一致す蓋し信仰は其性質として聖き感情を惹起せしめ善き行爲を來らす者なればなり又彼の「ブリマウス、ブレズレン」派と呼ばるゝ宗派あり熱心に遷着の教理を唱へ或る者は尤も極端ある滅法論に走らんとする迄突進せり
新教の稱義の教理を離脱せる所の者も亦今時期中に多くあり殊に英國の儀文派は其精神にも其文字にも尤も遠く離れたる者とす彼等は其説を「ヘッテンボルグ」に取るよりは寧ろ「ローマ」に取り保羅に於て見出さんより

は寧ろトレントの博士等に於て見出せりアセー此派を記して曰く「トレン
ト議會の稱義を論ぜたる所にして吾人の受け能はざる者一としてあると
あり」(Eirenicon)

マライエル
マヘル

セルマンの神學者中には稱義を以て主觀的となす者多し「マライエルマヘ
ルは即ち其例なりバアード曰く「マライエルマヘルは稱義を以て赦罪の宣告
に依て顯はれたる神の働作のみならず人間の内に新生命を形造くる所の
神の働作なり」と説けり(Dogmengeschichte)「マハインテックも亦教へて赦罪
は基督との合夥を預告する者なり」と云ひオランダが稱義は基督の住
居に由て來るとの説を賛成せり「エプランドは曰く「稱義は父の働として見
るときは裁判上の事なるも基督の働としては新生と同一なり即ち基督
我等に住み我等基督に居るを云ふあり」と氏も亦主觀的稱義の説を取らし
を知るべきあり(Quaest. by Hodges, P. C. III, chap. 17, § 11.)

モリス

は合夥の
は合夥の
は合夥の

子となせ故に万人は基督の復生に於て皆義と稱せらるべきを得たり故に
今は只之を知覺するを要するの事とモリス又曰く「使徒保羅は神の子人の
子なる基督の稱義は即ち彼自身の稱義なりとせり是蓋し彼は「ルカのソ
ク」ありしが爲なり又希伯來人中の希伯來人を「ルカ」が爲ならず只人
を「ルカ」が爲なり若し神は基督を死より起して之を義と稱し又是に依
て人類を「ルカ」と稱せたりとせば人類は産み給へる獨子に在りて神の前に義
とせられ神の子と呼ばるべきと云ふ事も決して不當にあらず」と(Thologian
Essays IX)

プシナル

ホレニス、プシナルの説に依れば稱義とは神と親密なる關係に入りて義人
となさるべきことなりとす即ち稱義は諸靈の父なる神と眞實に親交する所
の人の状態を指して云ふ者にして人は一瞬間に此の親交に入るを得れば
稱義も亦一瞬間に成る者なり是に依て成聖と稱義とは異なること甚だし
氏の言ふ曰く「義とせられたる人の心識は正義の信任を以て充たされ恐懼
の羈絆を脱して自由となる然れども心識の裏に或は其下に尙變化せらる

マルフォア
ド
ハッヂの皮
相合理派の
稱義論の評
論

べく擧めらるべき一大領地あり是れ決して一時に革新せらるべきにあらず只善良なる心識は深く其根源に降り之を愈やして漸々完全の域に至らしむ斯くの如く人は一時に義と稱せられ漸々に聖とせらる稱義の終結したる所是れ成聖の初なり」と(Forgiveness and Law)マルフォアの説も亦殆どブシチルの説と同く眞實正義の附與を旨とす氏曰く信仰に由て義とせらるゝとは信仰を通じて正義を得ることあり即ち我等の性質を取て正義を満たしたる基督との親交に依りて實際義を得ることなり義人を信仰し家族及び國民の生命の根源なる基督を信仰するに依て人は遂に自身を去り眞實の生命を得正義に入り正義の人となるなり決して單に自ら義とするにあらざるなり(Republic of God.)

確證は義と
する信仰の
本性あるや
否やに付て
近代一般の
傾向

節貞操慈善等は聖靈より出づる結果として見るときは救の恩寵なれども目的の手段方法として用ゐるときは救の性質を全く失ふ者なり……回々救に一の物語あり靈魂は樂園に入る前に先づ一の橋を通らざる可らず其橋の狹隘あること及に等しく且つ炎をたる猛火の上にあり此試験を忍耐して通過せし者は始めて樂園に入るを得べしと今善行の方便によりて天に入らんとするは尙猛火の上にある白及の橋を踏而して樂園に達せんとすると同じく到底能くせざることなり」と(F. H. Hedge, Reason in Religion, B.K. II. Essay VI.)

第五期 贖主及び贖罪の教理

ウ井スレ
の確證の教

例外

只特別の試みの場合は此限にわらずと説けり「メソヂスト」派の持説は即ち是な殊にウ井スレは確證の教理を大に重んじたり氏は二重の證據即ちハ聖霊の證據一は我等の靈の證據あるを論じたり聖霊の證に關して氏云て曰く「聖霊の證據は靈魂内部の印象にして是に依て神の靈は直接に我が靈に證して我は神の子なり耶蘇基督は我が爲に生命を棄て我を愛し我が罪を洗ひ我が如きものをして神と和睦せしめたるを確知せしむるあり」と (Sermon) 直接に神より來る此確證は信徒の生命の發達に缺く可らざる者なり蓋し之に依て神の愛を真正に知覺するを得べく而して此知覺は聖き感情の根源あるべければあり又我等の靈の證據は善き良心と同一にして我等は聖霊の果を有するを證する者あり此第二の證據は聖霊の間接の證據と云ふべきなりウツトソンも亦ウ井スレと同説を取れり此説に異なる者は幾何ありやは容易に知る可らずウツトソンの云ふ處によれば英國教會の福音派は聖霊の證を以て只間接のみとさせるが如しトラスノマニは曰く「聖霊ハ聖書に記載するが如く人の子供たるの性質と

基督教徒の
完全説を唱
ふる法メッ

感情を與ふることと依りて明に神の家族中に加へられしことを證す」とカ
ルビン主義は非常ふ盛に此説に同意すハラスノマニ曰く聖霊の間接の證據
は惟一の證據あり夫れ恩寵は其本性自ら知覺し得べきものなれば偽造と
は明らかになり故に充分なる確信を得んとて別に聖霊の直接の證據あ
るを要せず若し聖霊は我等に與ふる恩寵を以てし我等の心を啓發して聖
書を予解せしめ又真正の恩寵を知らしむる者ならば我等は恩寵は與かる
ことを知覺し得べきなり而して偽りの恩寵と異なる所も亦益々著明なる
べし若し信徒は斯くして聖霊の直接の證據ありとも慥かに恩寵を得たる
を知らんには何ぞ他に直接の證據あるを要せんや是を以て見れば聖霊の
直接の證據あらざるや明なり」と (True Religion Defined, Discourse II, sect. 5.)
天主教の確證の教理は既に久しく固定したれば今又之に贅言するを要せ
ざるべし「メソヂスト」派の主張は「メソヂスト」派の主張とて、
信徒完全に至るの説は前代に於てルソー派並にカルビン派の一般に反
對したる所なりしが「メソヂスト」派の中には此教理承認せられたり只實際

オベリン神學のウキスレー派と異

ウキスレーの定義

オベリン神學のウキスレー派と異

に之を説くに當て人々に依て其説を異にせるのみ近代に至てはウキスレーの風に従て之を説く者尠からずと雖も多くは之を以て信徒の漸次進歩して達し得べき理想とあし現世の信仰及び成聖の褒美として目前に信徒の前に置かれたる者とは説かざるなりウキスレーの意味に従へば基督信徒の完全とは性來の罪惡を脱却し愛に依て満たされ悦んで凡ての事を行ひ神より與へられたる方を正當に用ひて神に使ふる事なり只人若し罪を犯さざれば達したるしならん所の理想の度には達し得ざるのとは是を以て基督教徒の完全はアダムの完全或は天使の完全と異なる又はは客觀的の過失なきを云ふにあらざる蓋し判断の誤謬は未だ死ぬる能はず從て行爲に亦過失なき能はず只誘惑に従はず背逆は陥らざる全心を以て神を愛し苟も愛に反する者は之を忌憚し知て之を行はざるに至るを云ふなり

オベリン神學はウキスレー派の如く明白に信徒は此世に於て完全の域に達し得べきを稱す只兩者の異なる所は其論據各異なるにありオベリン神

學は撰擇に依て道德性を決す即ちウキスレーが罪惡の根は新生者にも尙存すと云へるを拒み説て曰く人の撰擇は全く惡か或は全く聖か孰れか其一に在り新生とは即ち撰擇の變更あれば全くの罪より全くの聖に至る者なりと博士フリンター曰く是は全く道德性の變化を云ふ者なり即ち全罪より全聖に至れる變化あり故に新生に加へ得べきは單に聖なる撰擇を確實に保守することのみ是を以て完全の成聖とは全く長く神の法律に従順することなりと思考す而して斯かる從順は此世に於ても達し得べし」と

(Lectures on Systematic Theology) ウキスレー派にてもオベリン派にても完全の標準を未だ墮落せざる時より取らずして救はれたる者の可能性より取れり

教會と國家との關係

千八百六十九年
のバチカン
會議は法
王無上權
を及無誤
を及無誤
を及無誤
を及無誤

之を代表するものとして、
教會と國家とは互に相獨立なりとの説は國教を有する新教國にも尙漸次
進歩するや疑なし、米國の風は益々勢力を得るが如しトマス、アノルド
及びローセ等の説は最良の政治は教會と國家との完全なる合一に在り
するにありとも此説たるや實際の人心には一般に棄てられたり何とな
れば斯かる合一をなして政府にも宗教にも害をからしめんとする状態は
云ふべくして行ふべからざることを思惟せられたればなり
天主教會にては近代に於て尙著しき事變を目撃せり、即ちゴット
の説を全く排斥し法王無上權説を固く定立したることなり一千八百六十
九年のバチカン會議の決議によりて法王は無上尊權無誤の君
主となり同位者なく競争者なく議會は單に法王に勸諫するのみにて其命
令を増補するの權あることあり又之に勸諫するお當ても先づ法王の命令
なくんば之を行ふこと能はず次に擧ぐる處の言よりも一層明瞭に法王に
無限の權力を歸したる者あり其言に曰く「若し人あり羅馬法王は信仰或は

法王無誤權の範圍

道德の事のみならず教會政治或は戒規の事に關して一統教會を單に監督
し或は指揮するのみにて賞罰の全權を有せずと云はる其人は呪はるべし
又法王は單に其樞要の部分に有するも其全權を有せずと云はる呪はるべ
しと云ふ事
法王無誤説に關してバチカン會議の決議は左の如し曰く「議會は基督宗教
の始より傳來せる傳説に信從し救主なる神の榮、萬國教會の譽、基督教
徒の教等に關する教義を賛諾し且つ云はんとす夫れ羅馬法王は殿より教
もるとき即ち基督の牧者及び教師の職を果たす時は其無上の使徒權の德
により神が聖彼得に約束せられたる助に依り無誤の權を以て信仰及び道
徳の事を教ゆ此無誤の權は救主なる神が其教會に與へんと欲し玉ふ處た
り故に此教理たるや教會の一致より來りしにあらざれば其自身に於て
改むべからざる者なり」と
無誤權の凡て信仰と道德の事に關すとの記述は實に擴めて用ての事件に
及ぼすを得るなり、若し法王は科學の事若くは歴史の事を以て信仰若く

は道德に關するとなさば即ち是れ無誤權を以て確定するあり然らば則ち
 六ヶ敷道理試験考察等の途を取らず直接に彼得の椅子より來る聲を以て
 判斷するを可とせばし、實に「マテロン」議會の決議發布せられしや否や有
 名ある高僧は明白に此の推論をなせり、「カール・デタル」マンニグは法王の
 無誤權は凡て天啓に反對ある事に及び凡て敬神家の耳に反することに及
 び又凡て正當信仰の束縛する處の事に及ぶと稱せり、諸氏の言に曰く「無誤
 權は科學の眞理にまで及ぶことあり例へば實質の存在の理の如し又自然
 の道理の眞理にまで及ぶことあり例へば靈魂は物質的にあらずと云ふ理
 の如し又超自然の事にて天啓せられざる事に及ぶことあり例へば聖書の
 或る經文を神の權力ありとし或る者を之なしとするが如し又天啓にあら
 ず單に人間歴史の事にして之なければ善良の信仰を保全する能はざる者
 あり例へば使徒彼得は羅馬の監督なりとの事「トレント」の議會及び「ナ
 カン」の議會は總會の性質を有す即ち正當に集會し正當に批准せられたる
 こと「パイアス」九世は正當に撰擧せられたる彼得の繼續者あること等は純

此説を辨護
 する議論

全たる歴史上の事かれども此等の事を判斷する判官は無上の法王なり」とい
 又歴史上より法王無誤説に反對する者あり殊に「パイアス」の例を引て其
 説を證す氏は此説に答へて曰く「此反對に眞正に答へ終らんに敢て長々
 しく駁論を答解するに及ばず只信仰の原則に訴ふべし即ち如何なる教理
 にても教會の神の傳説中に含有せらるる以上は如何なる人間歴史上の事
 も之を左右すること能はず正に「タータリアン」の云ひしが如し」(The Vatican
 Council and its Definitions, 1871) 又此論は眞に敏捷なる佛蘭西人事實は其持
 説に反すと云はれし時に之に答へて斯くまで事實は悪きかと云ひしお似
 たり奈何せん確信の原因は專擅ある權力の宣告よりも尙他にあるを
 法王無上權説並に無誤説を辨護するの議論は甚はだ淺薄にして單に必要
 を以て證となすに過ぎず無誤の判官は必要なり故に無誤の判官ありとは
 天主教辨解家の重なる原則あり、「セ」、「エ」、「ニ」、「三」、「マ」は明瞭に此原則を
 表白して曰く現今に於ては心靈上の專權者を要すとは其專權者あるの最
 大の議論あり」と(發達論) 又「教會の歴史」の論議の終りに於て

ペロンの説

ペロンの説は天主教を離れたる教會は悉く悪魔の會堂なりと稱すと雖ども其内にも教は全く能はざる事なりとは云はず例へば正當に授洗せし小兒の如きは全く知らざる者されば其靈魂は尙正當教會に屬すと云ふべき也
以下は天主教會内にては寛大に過ぐる此の説を吐きたれども敢て罪せられざるを見れば近代の天主教會も亦通例斯かる説を容れたるを知るべきなり
第二節 禮典論
ルソーが教會中の合理的傾向を有する人々は禮典に關して稍ツリテ
の説に接近するに至りしも保守的人々には依然と舊て先代の
の説を維持するなりト云々
派は禮典を重するに於ては
派と異なりざるもルソー派の如く説教の言葉を重せず寧ろ天主教派が犠牲を捧げる祭司職の代りに説教をなす傳道職を重するの傾向あるを非難する者あり故に該派は禮典に關しては
派よりは寧ろ天主教

ルソーの合理的愛せる禮典論
トラクスマリアン派

獨逸改革派

小冊の著者

天主教會の意向の教理を近代に於て代表する者

派は一教前と云ふべきなり其獨逸改革派の代表者中其は獨逸に於ては
の如き米國に於ては
の如きは禮典に關して甚だ玄奥的の説を唱へ教主基督の如き神人的の生命に與かるには是非必要ありと云ふ
然れども新教の大部は先代の終に於て流行せる改革派の説即ち禮典を以て神の恩寵の徴又は印なかりし特別の恩寵の賦與せらるる方法なりとせず寧ろ機會なりとす
説一般に行はれんとすの傾向あり
天主教には禮典全體の教理に先代より發達せし所あり只單に先代は
の意向の教理の解釋を確定せしを見るのみ
曰く教會の爲す所を爲さんとすの意向には必ず教會の外部の行のみならず此行を爲すの目的の例へば洗禮の際には人を基督の繼交にたらしめんとすの意向も合するあり
Dogmatic, vol. III, p. 122
ペロンの之に附加して曰く意向とは即ち基督の設立し玉へる者を聖とし又教會の聖としたる者を正しく行はんとすの心の状態と云ふ
Prælectio Theol., Tract. de Sacramentis in Genere
三、洗禮

洗禮必要論

新正 洗禮の必要論

千八百八十六

新教者は互に洗禮を重んずるの度を異にするも之を執行するは絶對的に必要なりとせしむ相對的は必要ありとせざるなり。又小兒は此禮式に預からざるの理由を以て滅せべき者に非ずとは新教者一般の信仰なり。カトリックが惡人の小兒は消滅すべきと云ひたるは洗禮の必要欲くべからざるの意に出でしに非ざるなり。然れども天主教者は之に反し洗禮を受けざる小兒は救を受けずと唱ふ。クリストは思へらく洗禮なくして死せる小兒の内には洗禮を志願するの徳は依て救はるゝ者もあるべしと云然れども是は天主教會内例外の慈愛心あり。カトリックは之を呼んで明白なる誤謬とせしむ。氏は又天主教の學者の説は關して謂ひ曰く「過嚴なる説を取る者も皆通例受洗せざる小兒は直接の刑罰を免れざるを云ふ。然れども溫和なる説を持せる者は悦で父の家は多くの住家あるを唱ふるなり。然れども若し彼等受洗せざる小兒の爲に備へられたる住家は理外の幸福の場處ありと思はば是れ誤なり」(Dogmatica, § 104) 此は次の命題をなせり曰く「洗禮なくして此世を去る小兒は永遠の救を達せざらん」と云又曰く此

受洗せざる小兒の運命

新正 洗禮の必要論

命題は教會信仰の二ありと(Prælect. Theol. De Hom.) 敬虔派は成人の悔改に重きを置きたれば自然と小兒の洗禮は小兒を更生せしむるの效あるを拒むの傾向を生ぜり。合理派は洗禮には其の更新力なし。只是れ靈の善の始め又表號あるのみと云ふなり。近代のルター派は尙習慣によつて洗禮を更生の禮式と呼ぶを常とせり而して或る者は依然として七世紀の神學者が附したるが如き充分の意味を以て之を云ひ又或る者は幾分の制限を置き殊に小兒洗禮の問題に及では大に之を制限したるなり。カトリックは曰く洗禮は新生の基礎を置く。恰も基督は教會の基礎を置くが如し然れども教會は隱然先きより成立せしむ。實際は「マンテオニスト」の聖靈降臨に依て完成せし如く更生も亦洗禮に由て其起初の能可能性を得るも聖靈の賜與によつて其實際に來るなりと。故に吾人は云はんとして洗禮を受くる者は其「マンテオニスト」を得るまでは實際更生せずと即ち聖靈來て心中に新意識を興し其洗禮の恩寵を榮むると云ふなり」(Dogmatica, § 254) 此亦同一の結論をなして曰く「洗禮の賜與する所の者は新生其物は非

第五期 教會及び禮典

千八百八十七

監督教會の立場

す新生の力なり此力の働らくや否やは洗禮を受くる人心の如何にありと
 (Dogmatic III, §14) されども小兒の洗禮を以て新生の現實とさ
 ざる其特許ありとせり新生の現實には自覺力と自己の働きたるを
 らず、然るに小兒には之なしと云へりニッチはカアルピンの風に從て洗禮
 を以て新生に入るの特許又印なりと云へり、斯く觀察するときは此説た
 るや未だ異説紛々として一定の位置に達せざる者の如しドナルト云へる
 おり曰く「此教理殊に小兒洗禮に關しては明白確固たる形状未だ成らずと
 (System of Christ. Doct. §139) 成人洗禮の場合には洗生は其信仰と悔改とに由
 て來るとは稍々承認せられたれば、此派中に之に關して左程の異説
 あり、然るに小兒洗禮の立場は監督教會の立場に對し、能く定義したり、其
 言は曰く「監督教會は神に感謝せんとす蓋し神其聖靈を以て小兒を更生せ
 しめざる其養子となし其聖教會に入らしむればあり」と此語の意味に關
 して氏云て曰く「種の人ば此語を以て前知、假定、慈愛の語とせず即ち

ウキスレー
ワットソン
等の立場

前知とは成人の洗禮に欲く可らざる悔改と信仰の前知を云ひ假定とは小
 兒の將來の性質目的を其保管者が代表するとの假定なり、又慈愛とは小
 兒は凡て其約束せられたる事を受容せしむるを云ふなり是に於て小兒は更生
 する者ありとなす又一種の派は此説を以て妄誕無稽となし斷言して云ふ
 洗禮によつて教會に受け入れられたる小兒は凡て幾分か神の恩寵を有せ
 ざるなし是れは單に約束せられたるのみならず實際與へらるるなり之を稱
 して更生の恩寵と云ふは正當にして聖書に合ふなり、然れども敢て更生
 は愛に成し終れよと云ふは非ず只其始りなるのみありと此説稍々行は
 るゝが如し第三の者は其數至て少し彼等は云ふ洗禮に由て更生の恩寵は
 充分賦與せらるる故に洗禮を受けたる小兒は新らしき人間ありと (Bib. Sacra,
 October, 1863) 然るにウキスレー等は、洗禮に於て更生するの説を承認せり、
 ウキスレーは大體上は小兒の洗禮に於て更生するの説を承認せり、
 ワットソンの説は先きに擧げたる監督教會の派の所謂第二説と符合す、
 然れども、ドナルト派總體は云ふ時は寧ろ小兒洗禮は將來恩寵を受く

「バプテスマ」派

「バプテスマ」派

ルーテル教會近代の發達

るの方法ありとするも直接に恩寵を受くるの機械とはあるべきなり又ルーテル派及び英國教會に關係なき新教者は大概此方向に傾くあり左れ其内には小兒は洗禮の際に更生するを得るのみならず多分更生する者ありと云ひし者亦きに非ず此かる説を取る者は成人は洗禮の時に更生すも唱ふる者なりとす此等小兒は洗禮の際に更生する者なりと云ふは「バプテスマ」派の説によれば洗禮とは寧ろ更生せる信徒が基督を表白するの行に於て神の之を用ひて人を更生せしむる者にあらずとす此等三、晚餐禮思想と云ふは五箇の論議の第一に於て論議せる所なり又此カトリック派の肉體現實説は尙近代にも存せり然れども多くの例外なき非カトリック派の「バプテスマ」派及び「バプテスマ」派の如きは之を棄て、カトリック派の現實説を取れば「バプテスマ」派は晚餐には基督單に靈上の現在を著して適當なる人々の恩恵を與へ玉ふのみと信じまた米國のルーテル派は大畧氏の説を取ると稱せし、カトリック派は之に反して舊時のカトリック派の説を取

儀文派の説

「バプテスマ」派

「バプテスマ」派

基督の榮光の人跡現在するを唱ふ又近代ルーテル派の復興は勿論同説をして再び盛ならしめたり英國の儀文派は熱心に現實存在の説を代表せり或る人は自ら此説を稱して「現實的客觀的の存在説」と云ひ以て一方にカトリック派と近接し他方天主教に類似する説を含有せしめたる、カトリック派の呈出せる共存説「バプテスマ」派に付て謂は曰く此等の神學者は「バプテスマ」派の呈出せる共存説を代表するや明なり、彼等は晚餐の跡と血とは榮光ある人跡即ち基督の聖人を云ふを解釋し之を禮典の内部と稱し又「バプテスマ」派と葡萄酒を其外部と稱し兩者は全く祝福に依て合躰し尙其特質實性を保有すと唱ふるあり是れ純全たる「バプテスマ」派にして其差は所はカトリック派は基督の現在を禮典執行の時限のみ限り又之を犠牲とはなさず之に反して客觀論者は稍々天主教の犠牲説即ち「バプテスマ」派の説に接近するなり、(The Catholic Doctrine of the Sacrament and Participation of the Holy Eucharist, 1876, P. 228.) 人跡即ち「バプテスマ」派の「バプテスマ」派及び「バプテスマ」派等の玄奥的の説によれば晚餐は基督の神人的の生

及びテビンの説

新教の他の部分に尤も行はれたるペローンは死者にも赦罪券有效なるを説く

新教の他の部分に尤も行はれたる

深正眼 教會史の概論

千百九十三

命を通與する方法たるなり。カールは次の如くペロンの説とカールの説とを區別せり。曰く「カールは基督の人性は地上に在らず。人の靈魂舉げられて基督に至り以て現實に其肉に與かり神秘的に永生に養はると強唱すれども博士ペロンは基督の人性は其地上の教會に現存し自ら其全生命を人間に通與じ人間は又基督の聖躰に與かると唱ふるなり」(Bib. Sac. January, 1863.) 新教の他の部分には一般に中和説即ちカールの説を制限する者行はるされどツツキンゾの説も亦あるに非ず。天主教の晚餐説は先代に於て精細に定義せられたるは近代に至ても少くも變ずる所なし。又其他天主教の禮典と稱する所の者の教理に於ても發達なし。只「ペロンは痛悔禮を關して謂て曰く神は自ら死人の爲に赦罪券を授けらるゝの任意故に死人に取ては赦罪券は其權力限り也」と云ふ。基督の榮光の人は探訪するに神人又聖人「ペロンの説は其權力限り也」と云ふ。

第六章 終末學

近代の千福年論者

第一、千福年の説即ち更に詳言すれば千福年前基督再臨説は今代に於て著名の學者の取る所となり、ニカラ以前の時代より未だ會て見ざるの勢力あり。ニカラの學校に於て之を代表する者起り尙近代にてはホフマン、カーステン、デリッヂ、アウベルリン、ロトセ及びパン、オルケルヨイ等之を取ら。又大英國に於てはウォン、ギル之を代表し次てピツカステス、ボナ、フレア、イ、ヒ、エリホット及びカミング等之を賛成し米國にてはセイス、マツプヒールド及びア、テ、ローテア此説を取り、又其他の諸教派にても之を説きしことは千八百六十八年の「プロフヘテカル、コンフヘレンス」の記録を見て知るべし、然れども神學界の大潮流は尙此説に反對の方に向ふあり。前千年期説の一例として吾人は次に「ヨセフ、エ、セイス氏の證明を引照すべし、(一)耶穌基督我儕の尊崇すべき贖主は其權力と榮光とを以て再び此

セイスの説

第五期 終末學

千百九十三

世に飯ること正に此世より昇りし如く現實なるべし、(二)此再臨は世界一般の悔改の前にあるべし、即ち罪の人尙其惡を棄てず地には暴風、戦亂、無信、邪惡、滿つる時なるべし、此故に所謂千福年以前にあるべきなり、(三)此再臨は他の人民を滅ぼし之を盡くすが爲みならず之を裁き之を服し之を新たにし而して之を福せんが爲なり、(四)此再臨の時に於て耶穌は聖者を死より起し生きて主を待てる者を移し各人の行爲に従て之を判し之を雲に受け榮ある天の王國に入らしむ、(五)基督は此時教會及び國家の現在の政治を悉く打毀し罪惡無道の大中心を焚き盡くし全地を震動して己れの永遠の管下に置かんとするなり、(六)此一大騒亂の際に猶太國民は不思議に其祖國に恢復せられ耶蘇を抱て其牧主大王となし以て其敵より救はれ諸國民の頭に置かれ世界幸福の泉源となるべし、(七)其時基督は其父ダビデの王位を再建し之を天の榮に擧げシオン山を以て其神帝國の都と爲し以て聖徒と共にヤコブの家を管理し世界を支配し千年の長きに及ぶべし、(八)此千年期間は人類新時世に生息しサタンは縛せられ世界は長き

千福年論者も詳細の點に至ては互に異なる

安息を受くべし、(九)千福年の終に於て最後の叛逆は鎮靜せられ此時陰府に於てありし處の惡き死者は上て審判せられ而して凡て善に敵する處のサタン、死、及び陰府等は永遠の滅亡に終るべし、(十)此等の不思議なる事に依りて全地は墮落の結果を悉く恢復せられ神の正義の攝理著く顯はれ阻は悉く去り死は呑まれ全地の住民はアダムが先きに受けたりしより一層以上の幸福榮光を受くるに至るべし、(The Last Times, 74, 1878.) 千年期王國の詳細ある状態を説くに當ては現今の千福年論者中に異説甚だ多し、ホッチキ曰く「一説によれば基督及び復活したる其聖徒等は現實見るべきの状態を以て千年間地上に王たるべしとす、又一説によれば復活したる聖徒は天に住して地には住せず恰も天使の如し、左れど第一の復活に與りし者は天に住すと雖も尙地を支配すとす、又他の説によれば悔改せし猶太人は其生國に恢復せられ以て全世界を支配すべしとす、又他の説は左の如し聖書は人類を三種に分つ曰く異邦人曰く、猶太人曰く神の教會、而して千年期に關する預言は此世界に於ける猶太人と異邦

人との關係的の位置を前言せし者にして復活受榮せる基督信徒を指して云ふ者に非ずとす、他の説に曰く此地は昔し洪水に依て變化せられたるが如く末日には火に依て變化せらるべし救はれたる者の天とは即ち之を云ふありと、博士カミング及び博士セース曰く彼等は素より阻と罪より脱したる地の外に天あるを望まざるなりと、尙他の一説に曰く天に二つあり、一は下あり、耶ルサレムに二つあり一は手にて造られ一は然らず、兩者共に永續す又此兩者は共に同く榮光幸福の場處たりと雖も地上のエルサレムよりは遙かに劣る恰も環の中にある環の如し、人間は地上に生死して幸福を受く只完全にあらざるが故に新生と成聖とを要す彼等は死するや直に天上の國に遷ると(Pl. IV. Chap. 4. §5.)

第二、死と復活との中間の状態、
今時期に於ては改革時期の神學に比すれば一層中間の世に注意する者ありしこと明かり、カーニス、トルナー、及びマルテンセン等は此傾向を顯はせり、即ち説て曰く死は直に人性根本の惡を取り去るべしと想像す

中間の世の
教理を重す
る傾向新教
部内に現は
る

死に眠かり
との説を代
表する者

カーニスの
言

るは誤なり、故に信仰に在て死する者も尙多少清めを要すと、カーニス曰く教會は好意を以て死せる朋友の爲に祈らんとする信徒を禁するの不可ありと然ども是等は必ずしも天主教會の中間の世の思想を賛同するにあらざることば言を俟たざるなり

中間の世には睡眠の状態を以て存すとの教理は近代に於ては之を取る者甚だ稀なり、大監督ホエートレーは聖書の語句は此教理を示すと云へり、第二降臨派の或者は中間の世睡眠の状態説を取るが如し否寧ろ彼等は暫時消滅の説を取る者なりとす

又世の終に於て一般の復活あるを信する學者等は中間の世には靈魂は一の肉躰をも有せずとの説を確取するなり、ニッチ、マルランセン、デリツチ、及びワンダ等は即ち然りとす

第三、復活、
今時期の總躰より云ふ時は字義的解釋を復活に應用するを止むるの傾向甚だ盛なりと云ふべしカーニスはセルマンに於て此問題に關する思想

の變遷を叙して曰く「十八世紀變遷時代の神學者等は皆復活躰と現今の躰との間には正統派の教ゆるよりは一層大なる差あるを唱へり、即ち我儕の葬る躰は單に復活躰の下層たるに過ぎずと云へり合理派は肉躰復活とは唯靈魂不滅の理を解し易く且つ譬喩的に表はしたる者と説けり、其後一層基督教に接近する神學者及び哲學者等は現實の躰なくして靈魂の不滅は思想すべからずとなし、以て肉躰復活の教理を取る者あり、現今の教會内にあつて且信仰固き神學者等は肉躰復活説を教ゆと雖ども變遷時期の神學者と同一自由に之を信仰し學術的に躰と靈との關係を考察して而して信する者なり」(Dogmatic, II. S. 16)

合理派の説はカーニスの云へるが如く單に肉躰復活を否拒せしのみあり、現今に於ても適々之を代表する者あり及嚴格なる字義的復活説即ち現在肉躰の全分子少くとも其大部は復活躰に入り來るとの説も亦適々之を代表する者あり、此兩極端説の間には三四の復活説あり、其著き者を左に擧げん原子説なる者あり或る代表者なきにあらず、パン、オスチアル...

現今の神學
界は存する
異説

次の語を以て之を賛成せり曰く「現在の肉躰には見るべからず毀つべからざる原子ありて未來の躰の源となる、此あるが故に兩躰の差違は幾何大なるに至るも尙同一を失はざるなり」(Dogmatics, sect. CXIII)

又復活躰と現在の躰との同一は蓋し現在躰の分子は遷て復活躰を組織するに依との説を取る者あり、デリッツは極端の物質同一説と極端の形式同一説とを兩ながら乘て、此説を取る者の如し、其言に曰く「眞の同一は此兩説の中間にあり蓋し一度造られたる世界の一分子たりとも曾て消滅する者にあらず故に此腐るべき肉躰を組成する處の分子たる物質は決して消滅せず全知の神は何處も是等の存するを知り又全能の神は再び之等を集め得るあり、然れども此自然の世界と共に火の内に投せられ夫れより天地は榮光を以て輝くに至り我等の躰も亦夫より分子たる物質を再び得べし」(Bib. Psych., VII. sect. 1)

現今は於ても之と同様の説を爲す者甚だ多し唯火の清めの説は之を取らず、第三説は物質の同一と云ふ事には重を置かず只兩者組成の原則に於て同

一ありと唱ふるあり、即ち復活の際には此原則は靈魂に必要なる物質(現在)の物質にあらざるに適用せられて茲に復活體となす者なり此物質とは皆清められたる地より取りし者あり、セルマン近代の神學者は多く此説を取るヲエリアス、ミルラー、ラング、ニツチ、カーニス、マルテンセン及びドルナー等は其例あり、亞米利加にては博士ドワイトを初とし數十年前よりは之を取る者甚だ多し、ホツテボンド、エチ、ヒ、スミスは之を以て少くも許容すべき説となし、ペロイン及び監督フホスターハ之を賛成したる要するに此説は新教神學者の賛成を博すること敢て他の教理に劣らざることを期す、

第四説はスエデンボルグの説にして靈魂は既に存すとの説是なり、粗雑ある肉躰墓場に棄てらるゝや靈の躰を着けて靈魂飛揚して他界に活く、故に復活とは各人の死の際に生ずる者にして少くとも絶息後三日間に成る者トすスエデンボルグ派の以外にも同説を取る者ありジョセフ、ブライ、ストレット、ジョージ、ブッシュ及び其他のセルマンの神學者の如きは其例なり

未來試練の思想に對する普通の感情

萬民恢復説を取る者

第五、結局の賞罰、十八世紀以降死は試期の終なりとの教理は一般に行はれたりしが同世紀の終に及で例外の思想陸續顯はれ出で現今に至ては基督教歴史中未だ曾て見ざるの多數を以て此説を退くるに至れり、又萬民恢復説を取らざる處の有名なる學者中にも尙或種類の人は死後試の時期を有するを得べしと唱ふる者あり、彼等の云ふ處によれば万人皆一樣に基督の教に對して之を受くるや或は之を却くるやを決する好機會を有する能はざらざり、故に之を有せざりし人々は來世に於て之を選擇するの機あるべしとなす、ドルナー、マルテンセン、及びカーニス等は即ち然りとす、現今組合派の一運動は此説の取捨如何にあり、無限刑罰説に反對する處の萬民恢復説は之を特有とする所の教派以外にも亦其代表者なきにあらず、ライエル、ヘルは基督教徒の意識は幸福の域に與る能はざる者あるを見て惱む者となし、又其決定説と符合して萬民途には悉く恢復せらるべきを唱へたり、シエワ、イサーはライエル

改めざる者は消滅するとの説を取る者

パンオステルデーの文

マヘルの恢復説を賛して以て改革派神學の二重説を免かるゝ者と思惟せり、オルジョウセンも亦復恢復説を取りしかども氏ハ之と同時に此教理は聖書に明言せられし者にあらざれば之を以て公共の教訓となすは其適否を知らずとせり、又英國教會の自由派中にも恢復説の傾向見ざるにあらずエフ、デモリス、エフ、ダブリュー、ハアラー等は萬民必ず恢復せらるべしと斷言するは難しと雖も斯かる成行に至るを希望するは敢て禁すべきに非ずとの信仰を有せり、又其他の多くの學者等はローゼ、及びエドワード、ホワイト等の説に従ひ無限刑罰説を棄て到底恢復せらるる人々は遂には消滅に歸せらるべしとの説を取れり、又其他の多數の神學者は罪惡に固着する靈魂あり是等は永遠生存し且つ永遠不幸にゐるべしと論せり、パンオステルデーの次の文は能く此説を示すに足る曰く「永遠の淵おつて惡者は救の岸に渡るべからずと思惟するは難し、然れども又萬民悉く救はるべしと唱へ以て神の國も自然進行の一種にて終ると唱ふる説も亦少なきがらす危し、我儕は凡て救に關する説にして其基礎或は

未來刑罰の性質

宇宙神教派の恢復説

傾向に於て一方に神の無限の聖恩寵と他方に「あゝ過かりし」どの嘆とを并有するにあらざれば之を受けず」(Dogmatics, Sect. CXIX.)
 レンツマンの呈出して而して合理論派の或者の取る所の説即ち無限刑罰とは只關係的に幸福の少き者を云ふ蓋し發達劣等にして最上の幸福を受くる能はざる者を云ふとの説は一般に却くる所たりと雖も尙多數の人をば未來の應報とは直接に神の手より蒙らせらるゝ者にあらず人の自ら其性質を誤用したる結果として自ら蒙る者なりとの説を取る又眞實の火に依て罰せらるゝと云ふ説は新教内には全く失せりと云ふと雖も今時期の始めに於てはジョン、キスレー及びジョン、エドワードの如き有名の人々は此を稱賛するを見るべし又其他未來刑罰は單に過去の罪惡の爲に行はるゝ者にあらず罪人が尙罪惡に固着して止まざるに依り刑罰も亦絶へず之に伴ふ者なりとの思想は一般に行はるゝなり、
 宇宙神教派即ち公然恢復説を以て其特有持説と爲す處の教派中にも未來賞罰に關して種々の異説あり、ジョン、モルレー(千七百七十年英國より米

國に來りし人は未來刑罰を拒まずと雖も其無限繼續の説を拒めり、ホ
ゼア、バル、トは米國の宇宙神教派の中世を代表する人なるが全く未來刑
罰を否拒せり、蓋し氏教へて曰く凡て他界に於て知覺ある存在は初より
一箇幸福の存在なりと近代の同派中の學者は先代の説に戻り未來刑罰を
認識し只其無限あるを否拒するあり、左れと近代の有名ある一學者はバ
ル、トの誤説を祖述するの勇氣を有せり

惟一派の恢復説

近代の惟一派は一般に恢復説に傾き未來刑罰を以て其目的矯正的ありと
し又未來の試期には好機會元分に備はり萬民皆遂に善を選むに至るべし
と説くなり、故にゼームス、フリーマン、クラークは永遠の刑罰とは人の靈
性より來る者を指して其一時の性質及び一時の世界より來る所の一時の
刑罰と相對して云ふ者なれば必ずしも無終ありとするを要せずと説けり、
氏の言に曰く若し放蕩息子の譬喩は眞實に萬罪人に對する神の感情を示
したる者とせば罪人は遂には悉く神の贖罪の愛に依り其全能に依り立ち
戻ること必然なり、蓋し神に抵抗する人の意志の力は常に不定なれども

ヘツテの立場

神の愛の力は無限なり故に時勢の變遷により罪人は早晚悉く挽回され懺
悔して父の家に歸るの時あらん』(Orthodoxy, its Truths and Errors, Chap XIX)。
之に反してエフ、エチ、ヘツテは萬民恢復説には免るべからざる困難あつて
之を支ゆるの難さを云へり、曰く此は神學の一對の疑問なり之を否定す
るも之を可定するも共に論駁を容るべく共に疑を容るべし是は實に我情
の情性と理性との分離する處たり、情性は恢復説を望むと雖も理性は
恢復説——神學的并々哲學的の恢復説共に——が必ず至らざる可らざる
假定を破て之と衝突するを如何せん、夫れ神學的恢復説は各箇人心意の
正當の進行に全能の愛は強迫的に干渉すと論せざるを得ず、從て神性を
以て神性たゞざらむ、又哲學的恢復説は自改自治の勝利は必ず來る者
とせず、即ち人間に於て善性は必至なりとする者なり、此説たるや敢て
其基礎を人性の分解に置かず又は現世の經驗中に其證據を有する者にあ
らず吾人の見る所にては此説を維持する者は唯大担なる希望あるのみ、
然ども此希望たるや之を抱有する人には貴重ならんも此問題を批評的に

近代の天主
教は受洗せ
ざる小兒の
運命に關し
て説けり

スウエデン
ボルグ派

對究するに於ては一の利益あらざるなり」云々 (Reason in religion, BK. II., Essay
 Ⅹ) ハエチは或る人の靈魂は善に遷ることをせずして存するを得べしと
 唱ふも雖も知覺を備へて無終の刑罰を受くるの説を許容せず、氏の言
 ふ所によれば失はれたる靈魂は實體としては消滅するにあらざると雖も
 道徳上の知覺及び生命を失ふ者とす、
 天主教の死後の試期あるを唱へず凡て死すべき罪に於て死せし者は悉く
 永遠の刑罰に定めらる、又受洗せざる稚兒即ち只原罪のみにて死せし者
 も永遠の生命に入る能はずと説く、又彼等の刑罰の性質は如何との問題
 に關しては未だ一定の説ありず、
 の説を取る神學者は彼等の刑罰を以て單に消極的の者とす、天の國を有
 せざる迄なりとす、又彼等には神と其事とを關して自然の智識だけは充
 分有り此智識を以て大に満足すと説く者甚だ多し、
 教會に屬せざる或る人は又天の生活に此世の職業及娛樂を顯はすは愉快

を増すの事あるべしと思惟せり、又空く過去の記録に忠信ある敬虔家は
 矢張依然として天の幸福の最上の神を見るの悦にありとし、又此世よ於
 て筆す可らざる榮と幸福とは來世救の繼嗣たる人に待つとの預想を抱くな
 り、尤も分別思慮ある者はマルタンセンが其書の終りふ於て引用したる
 使徒約翰の語を以て満足するあり、曰く「愛する者よ我儕今神の子たり後
 如何未だ露れず其現はれんときは必ず神に肖んことを知るそは我儕其
 眞狀を見るべければあり」と(約壹書三章二節)

基督教教理歴史 終

第五期 終末學

皇朝通志

卷之四

五十五

皇朝通志卷之四

皇朝通志卷之四

皇朝通志卷之四

皇朝通志卷之四

皇朝通志卷之四

皇朝通志卷之四

皇朝通志卷之四



皇朝通志卷之四

皇朝通志卷之四

皇朝通志卷之四

皇朝通志卷之四

皇朝通志卷之四

皇朝通志卷之四

2/10/22

HISTORY

OF

CHRISTIAN DOCTRINE

BY

HENRY C. SHELDON

PROFESSOR OF HISTORICAL THEOLOGY IN BOSTON UNIVERSITY.

REVISED,

Second Edition.

TWO VOLUMES IN ONE.

From A. D. 90 to 1885.

TRANSLATORS:

MATSUTANE MATSUURA,

MILTON S. VAIL.

AOYAMA INDUSTRIAL PRESS.

THE JAPANESE EDITION OF THIS

HISTORY

IS DEDICATED TO

THE AUTHOR :

FOR WHOSE PAINSTAKING SCHOLARSHIP,

THOROUGH GRASP OF THE SUBJECT

AND

UNBIASED PRESENTATION OF THE FACTS,

THE TRANSLATORS

Desire to Record

THEIR PROFOUND RESPECT.

TRANSLATORS' PREFACE.

This is the first complete History of the Doctrine of Christianity published in Japan. All who are interested in the study of theology fully agree that there is a need of such a work.

The author, in kindly consenting to write a Preface for the Japanese edition, has presented some very cogent reasons for the study of the History of Christian Doctrines, and the translators think that especially in Japan, now undergoing such great changes in religious, as well as in other matters, is a thorough knowledge of the history of the development of Christian doctrines of real importance to all students of Christian Theology. The Japanese translation has been done by Rev. Matsutane Matsuura aided by Mr. Ume Bessho and others.

The translation of the Greek, Latin, and German sentences, and also the explanation of difficult passages was the work of Rev. Milton S. Vail, under whose general direction the translation was made.

The translators are painfully aware of the difficulties to be met in the translation of a technical work of this kind, occasioned by the lack of proper terms in the Japanese language, to fully express the language of the original work, and they would consider it a favor, if those who are inclined to kindly criticise the translation, would suggest more appropriate terms than these used, so that in future editions desirable corrections may be made.

Tokyo Ei-Wa Gakko, Aoyama, Tokyo.

March, 1892.

Revised, Second Edition,

March, 1895.

350743107 23071127117
PREEACE TO THE JAPANESE EDITION.

A broad and secure grasp of the truth requires the three fold basis of history, reason, and experience.

History, Biblical and post-Biblical, supplies indispensable data for judgement.

Reason looks into data provided, and critically examines them, in order to ascertain their import.

Experience, in the sense of an inward religious life, brings its subject into affinity with the divine source of truth, turns sympathy in the right direction, and assists reason in its difficult task.

Without the historical foundation, reason has no adequate safeguard against fanciful speculation. Without reason, or industrious thoughtfulness, there is no proper security against a one sided interpretation of history, without spiritual temper which comes from an inward surrender to divine love and righteousness, the mind lacks the proper standpoint for an appreciative view of some of the most important truths. Each of the three factors—history, reason, and experience—must be duly regarded, if worthy progress is to be made toward the complete doctrinal system.

The object of this treatise is to assist earnest seekers after such a system. By giving a clear and impartial survey of a great historical field, it aims to supply a portion of the needful data for a sound and comprehensive judgment.

The reader will observe that the author has not

written as an advocate or apologist. His endeavor has been to make his pages mirror the actual facts or Christian history, on its intellectual or doctrinal side, since the age of the apostles. He wishes not to impose a particular class of conclusions, but rather to assist his readers to make well-founded conclusions for themselves.

If, in the course of his perusal the reader should be unfavorably impressed by the conflict of opinions which he is called to observe, let him remember that Christianity is greater than any of its interpreters. While various leaders of thought have wrought worthily, no one of them has realized in himself the ideal union of historical knowledge, reason, and experience. So much is requisite for perfect interpretation, that it is no cause for surprise that history records much of contradictory and imperfect interpretation.

Perfect men would be needed for a perfect understanding of Christianity. Meanwhile it is the glorious vocation of the race to press forward toward the lofty heights in the Christian system, reaching as nearly as possible the uncorrupted thought of Him who is the Way, the Truth, and the Life.

H. C. SHELDON.

BOSTON UNIVERSITY,

December 25th, 1890.

明治廿八年四月廿四日印刷
明治廿八年四月二十七日發行

版權所有

譯者

山形縣米澤市上花澤仲町
千九百九十番地
松浦松胤

發行者

東京市麴町區紀尾井町
三番地寄留
清水俊藏

印刷者

東京市麴町區有樂町三丁目
二番地
小方仙之助

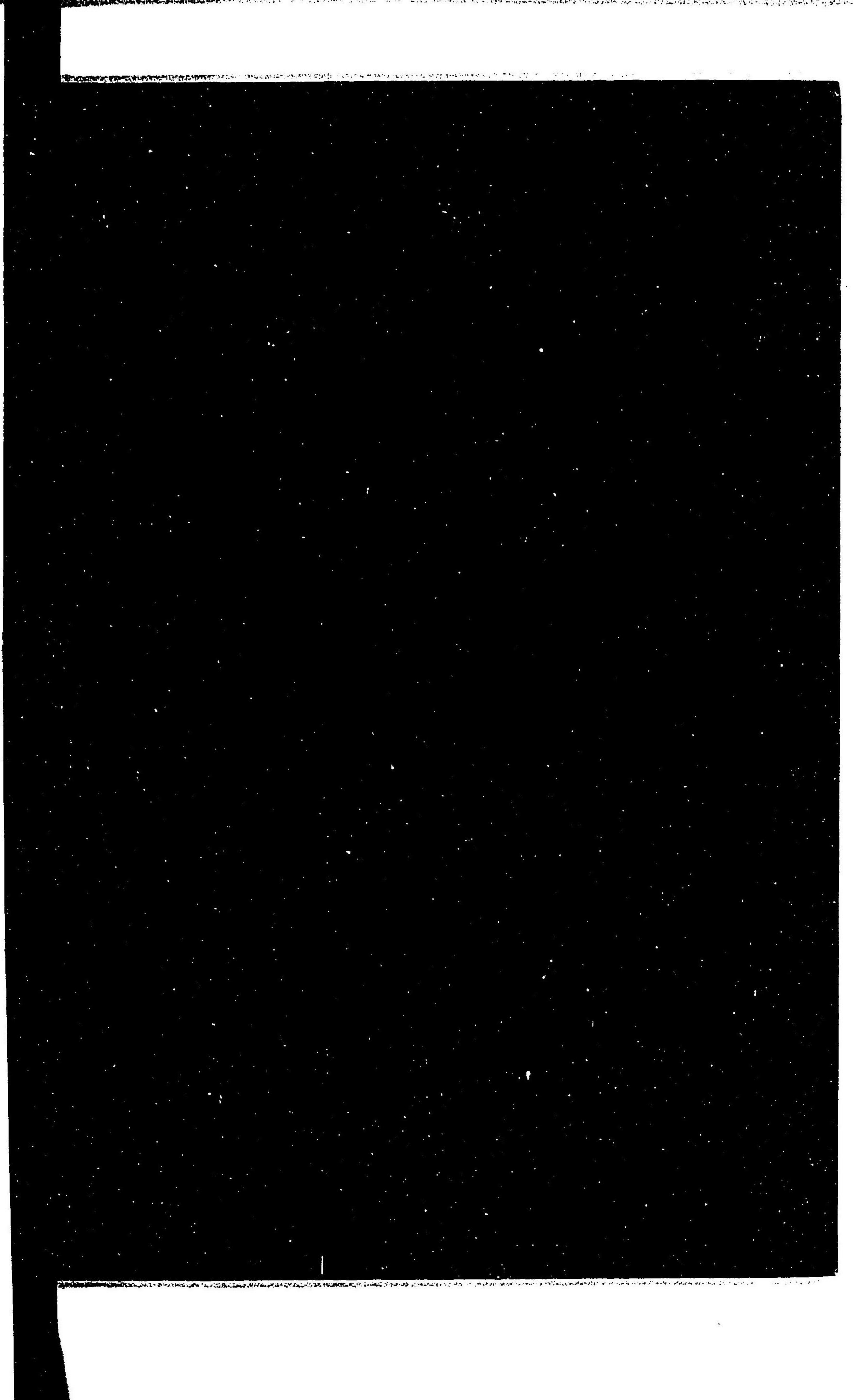
發行所

東京市京橋區銀座三丁目
八番地
メソヂスト出版舍

印刷所

東京府下南豐島郡澁谷村
一番地
東京青山學院實業部

金





020411-000-1

45-157

教理歴史

ヘンリー・シー・シェルドン/著

M28

ABI-0220



